

千葉市西唐沢遺跡

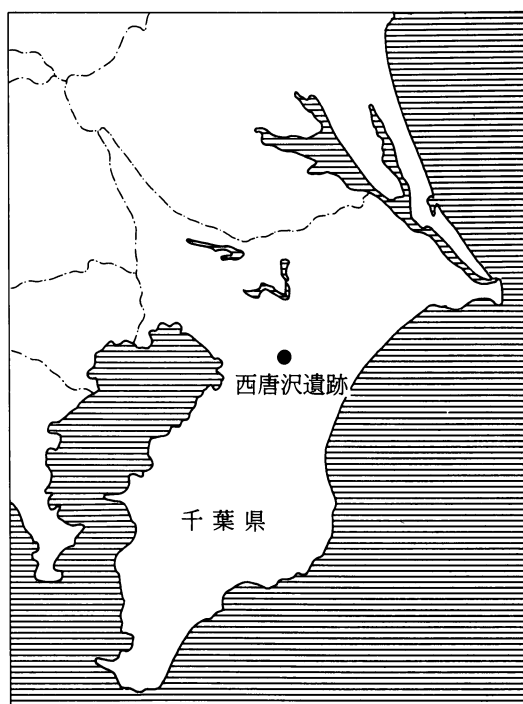
—かずさアカデミアパーク代替用地埋蔵文化財調査報告書—

平成8年3月

千葉県土地開発公社
財団法人 千葉県文化財センター

千葉市西唐沢遺跡

—かずさアカデミアパーク代替用地埋蔵文化財調査報告書—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第281集として、千葉県土地開発公社のかずさアカデミアパーク代替地建設事業に伴って実施した千葉市西唐沢遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落が発見されるなど、この地域の古代の生活を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また、普及啓発の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成8年3月29日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村 好成

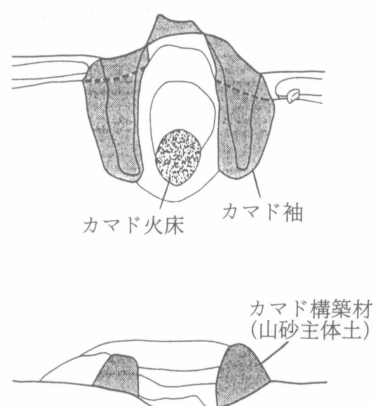
凡 例

- 1 本書は、千葉県土地開発公社によるかずさアカデミアパーク代替用地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県千葉市若葉区中野町1657-1ほかに所在する西唐沢遺跡(遺跡コード201-111)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土地開発公社の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長 西山太郎、千葉調査事務所長 田坂 浩の指導のもと、副所長 関口達彦、主任技師 山田貴久、主任技師 田島 新、主任技師 西野雅人、技師 小笠原永隆が下記の期間に実施した。
発掘調査 平成6年8月1日～平成6年10月31日
整理作業 平成6年11月1日～平成7年3月31日
- 5 本書の執筆は、技師 小笠原永隆が行った。
- 6 発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土地開発公社、千葉市教育委員会の御指導・御協力を得た。
- 7 本書に使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 参謀本部陸軍部測量局作成 1/20,000迅速図「中野村」
第5図 国土地理院発行 1/25,000地形図「東金」(N1-54-19-11-4)「蘇我」(N1-54-19-15-4)
- 8 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和45年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 10 挿図に使用したスクリーン・トーン及び記号の用例は、次のとおりである。

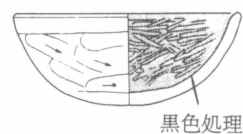
竪穴住居跡



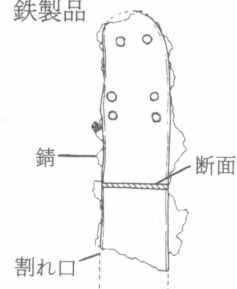
カマド



土器



鉄製品



本文目次

I	はじめに	1
1	調査の概要	1
2	遺跡の位置と環境	2
3	周辺の遺跡	5
II	遺構と遺物	8
1	縄文時代	8
(1)	遺構	8
(2)	遺物	9
2	古墳時代	10
(1)	竪穴住居跡	10
(2)	古墳	20
3	奈良・平安時代以降	21
(1)	竪穴住居跡	21
(2)	掘立柱建物跡	30
(3)	方形周溝状遺構	32
(4)	溝状遺構	32
III	まとめ	34
1	縄文時代	34
2	古墳時代	35
3	奈良・平安時代	35
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	遺跡付近の地形	1	第10図	002号竪穴住居跡	11
第2図	グリッド設定	2	第11図	002号竪穴住居跡出土遺物	13
第3図	西唐沢遺跡周辺地形及びグリッド配置	3	第12図	003号竪穴住居跡及び出土遺物	14
第4図	西唐沢遺跡遺構配置	4	第13図	004号竪穴住居跡及び出土遺物	16
第5図	西唐沢遺跡と周辺の遺跡	5	第14図	005号竪穴住居跡及び出土遺物	17
第6図	縄文時代陥穴	8	第15図	010号竪穴住居跡及び出土遺物	18
第7図	縄文時代石器	9	第16図	001号方墳及び出土遺物	20
第8図	縄文時代土器	9	第17図	001号竪穴住居跡及び出土遺物	21
第9図	002号竪穴住居跡カマド	10	第18図	006号竪穴住居跡及び出土遺物	23

第19図	007号竪穴住居跡	24	第25図	009号竪穴住居跡及び出土遺物	29
第20図	007号竪穴住居跡出土遺物(1)	25	第26図	001・002号掘立柱建物跡	30
第21図	007号竪穴住居跡新カマド	26	第27図	003・004号掘立柱建物跡	31
第22図	007号竪穴住居跡出土遺物(2)	26	第28図	001号方形周溝状遺構	32
第23図	008号竪穴住居跡	27	第29図	002・004号方形周溝状遺構・003号 溝状遺構	33
第24図	008号竪穴住居跡出土遺物	28			

表目次

第1表	古墳時代土器観察表	37	第3表	出土土器破片数一覧	40
第2表	奈良・平安時代土器観察表	38			

図版目次

図版1	遺跡付近空中写真	図版12	竪穴住居跡出土遺物(2)
図版2	調査区全景・遺跡近景	図版13	竪穴住居跡出土遺物(3)
図版3	002号・003号・004号竪穴住居跡	図版14	竪穴住居跡出土遺物(4)・方墳出土遺物
図版4	010号・005号竪穴住居跡	図版15	竪穴住居跡出土遺物(5)
図版5	006号・007号・008号竪穴住居跡	図版16	竪穴住居跡出土遺物(6)
図版6	009号竪穴住居跡・001号掘立柱建物跡	図版17	竪穴住居跡出土遺物(7)
図版7	002号・003号・004号掘立柱建物跡	図版18	竪穴住居跡出土遺物(8)
図版8	001号方墳	図版19	竪穴住居跡出土遺物(9)
図版9	001号・002号・004号方形周溝状遺構・ 003号溝状遺構	図版20	竪穴住居跡出土遺物(10)
図版10	002号陥穴・調査風景	図版21	竪穴住居跡出土遺物(11)
図版11	竪穴住居跡出土遺物(1)	図版22	縄文時代土器・石製品・土製品
		図版23	鉄製品

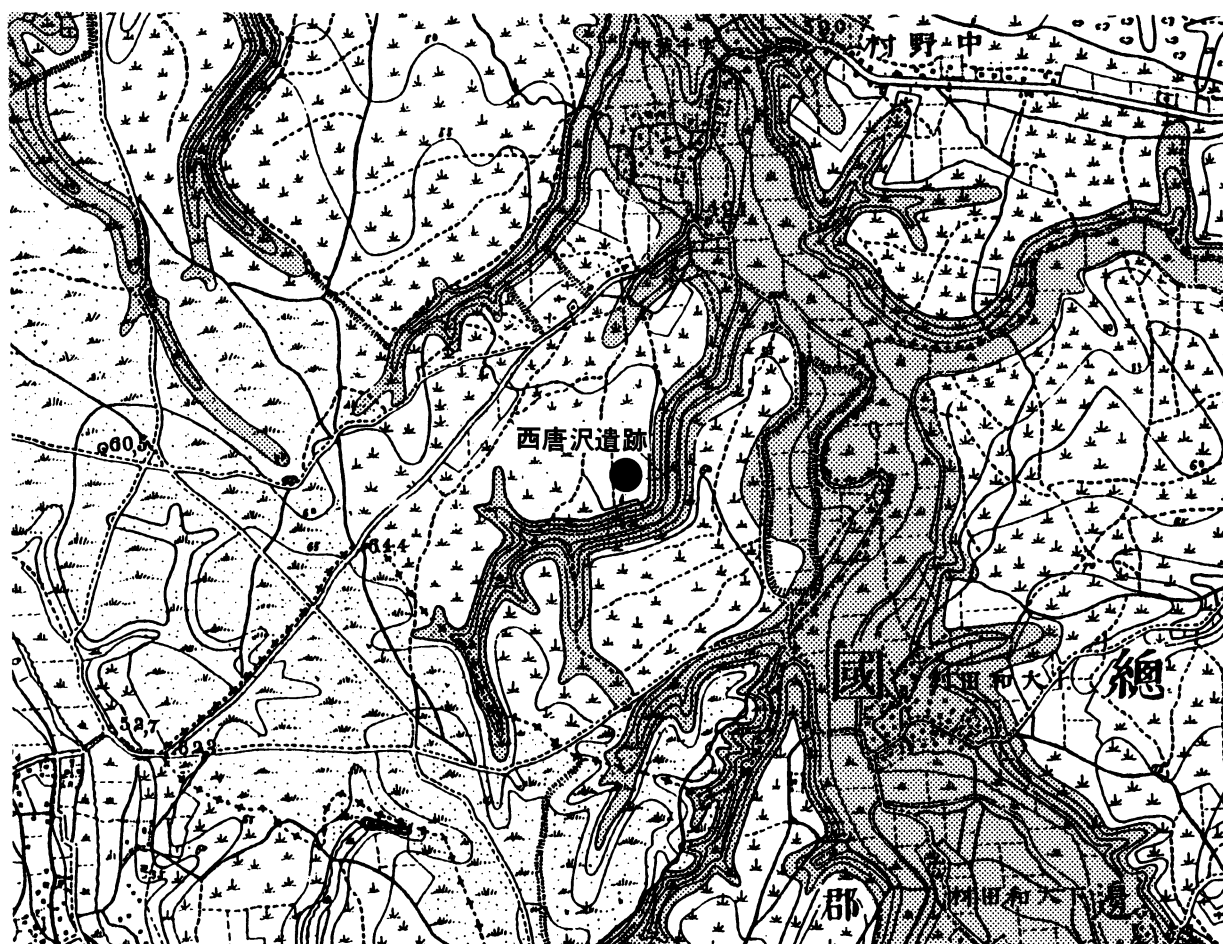
I はじめに

1 調査の概要

かずさアカデミアパークは、千葉県の基幹プロジェクトである新産業三角構想の一環として、その建設が進められている。平成6年11月には第1期工事が完了し、DNA研究所が開設している。今後も事業は継続され、民間会社の研究所等の施設を中心に建設される予定である。

その建設区域内に所在する養鶏場の移転先代替地として、千葉市若葉区中野町に所在する養鶏場の土地及び施設を取得して、一部既設の施設を撤去し、新たに同程度の養鶏場施設を建設する運びとなった。代替地内は、「西唐沢遺跡」の名称で周知の遺跡となっていたため、旧養鶏舎の撤去に伴い、現地踏査及び試掘調査が実施された。その結果、古墳時代と平安時代の竪穴住居跡が各1軒検出され、当該地には古代の集落跡が存在することが明らかとなり、発掘調査が必要との判断がなされた。そこで、県文化課の指導により、事業主体である千葉県土地開発公社と財団法人千葉県文化財センターが発掘調査の委託契約を結び、西唐沢遺跡の発掘調査を実施することになった。

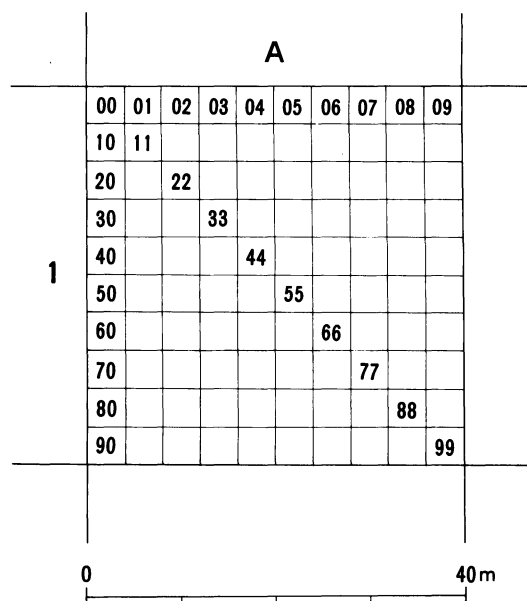
発掘調査は平成6年8月1日から同年10月31日にわたり23,500m²を対象に実施された。上層確認調査は調査対象区域全体に合計2,350m²のトレンチを設定し、遺物・遺構の有無を調べた。その結果、既存施設の



第1図 遺跡付近の地形

北側部分は縄文時代燃糸文土器を数点採集したのみで遺構等の存在は認められなかった。南側部分には古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡等が存在することが明らかとなったが、台地の縁辺部近くは地形改変が激しく遺構を確認することはできなかった。そこで、既存施設の南側部分を中心とした9,350m²について上層本調査を実施することとした。

調査区内のグリッドの設定については、公共座標を用い、発掘調査を実施する調査区全体に40m方眼の大グリッドを設定し、南北軸はアラビア数字を、東西軸はアルファベットを付した(第2図)。また、大グリッド内に4m方眼の小グリッドを設定した。東西方向を西から00~09、南北方向を北から00~90までのアラビア数字を付して、北西隅を起点にA1-00、01等の呼称で表記した(第3図)。



第2図 グリッド設定

上層本調査の結果、方墳1基、竪穴住居跡10軒(古墳時代5軒、奈良・平安時代5軒)、掘立柱建物跡4棟(奈良・平安時代)、方形周溝状遺構3基(奈良・平安時代)、陥穴3基(縄文時代)、溝状遺構1基が検出された(第4図)。遺構の密度は全体に低く、遺構の重複は見られなかった。本調査部分もソフトローム上部まで削平されていたところが多く、わずかに痕跡をとどめるのみの遺構も少なくなかった。

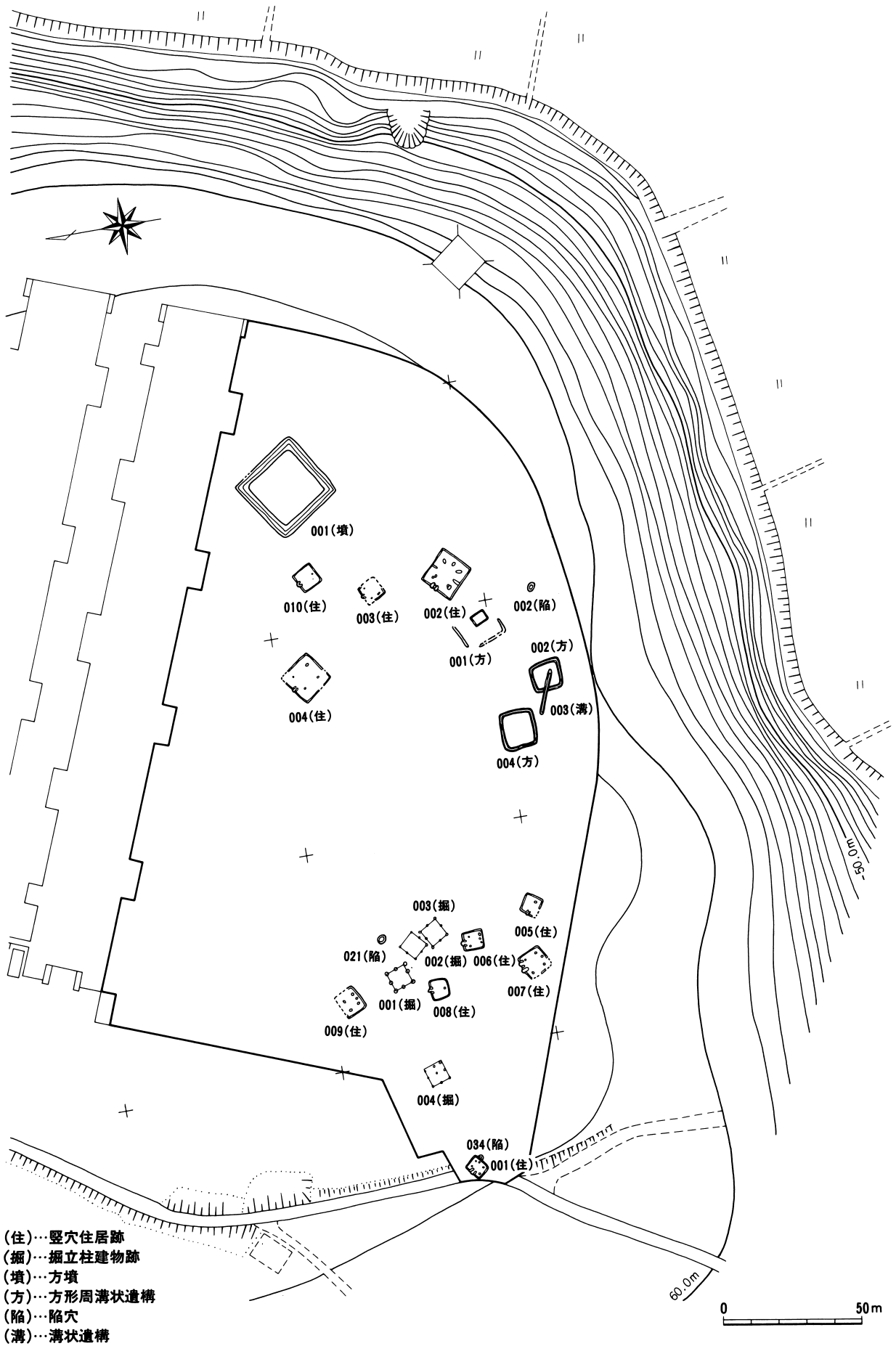
2 遺跡の位置と周辺環境

西唐沢遺跡は、千葉市若葉区中野町1,657-1ほかに所在する。若葉区中野町は千葉市の東端に位置し、八街市、東金市と境を接している。この付近は地形的に下総台地の南端に当たり、その主体をなす下総上位面に相当する。下総上位面は海岸平野として形成され、その構造は主に更新世に形成された海成の成田層を基盤とし、その上に関東ローム層を乗せて構成されている。遺跡は、千葉東金道路中野インターチェンジから南へ約700mの位置にある標高約60m~65mの台地上に立地している。付近は、鹿島川水系の最上流域であり、鹿島川へと注ぎ込む幾つもの支流によって、樹枝状の谷に複雑に開析されている。西唐沢遺跡は、こうした支谷の一つに面して立地する。台地面は大きく2段に分かれることが観察される。標高40m~50mライン間は台地の下段に、緩斜面を経た標高60m付近は上段にそれぞれ相当するものと思われる。遺跡は上位面の先端部に立地し、東から南側が開析された谷に面している。谷へつながる斜面は、水田面との比高差が約30mにもなり、急峻な崖面となっている。

若葉区中野町付近は、千葉東金道路の工事が始まるまで、中・近世以降地形が大きく改変されることはなかった。明治15年6月に測図された地形図を見ると(第1図)、台地上の大半は松林で占められており、畑地は集落の周辺のみにとどまっている。水田は鹿島川沿いの谷津を利用していたようである。本遺跡の所在地を見ると、松林に三方を囲まれ、南東部が谷に面した畑地になっている。また、昭和15年に作成された地番割図を見ると、この字名は「菱ヶ沢」となっている¹⁾。また、昭和35年の地形図を見ると遺跡付近は支谷と支谷に挟まれた台地上の微高地となっている²⁾。遺構配置と照らし合わせてみると、おおよその微高地の等高線上に沿うようにして、遺構が展開していることがわかる。養鶏舎の建設により、この微高



第3図 西唐沢遺跡周辺地形及びグリッド配置 (1/2,000)



第4図 西唐沢遺跡遺構配置 (1/1,000)

地はわずかな痕跡をとどめるのみになってしまっている。だが、遺構が調査区域の内側のみにとどまる様相を示しているのは、あながち後世の地形改変行為だけに起因するものではないのかもしれない。

3 周辺の遺跡 (第5図)

西唐沢遺跡(1)が立地する鹿島川へ注ぐ支谷周辺の台地上には、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の散布地が数多く確認されている。付近は千葉東金道路建設のほかは大規模な開発はなく、山林や畑地で占められている。従って、発掘調査例も少なく、付近の遺跡の性格は不明な点が多い。同じ鹿島川水系に属し、調査のされた主な遺跡には、縄文時代中期の集落跡が発見された千葉市中野僧御堂遺跡(2)、奈良・平安時代の集落研究の基本となった東金市山田水呑遺跡(4)、分水嶺付近に位置し旧石器時代から奈良・平安時代に至るまでの多くの遺跡が集中する千葉市土気南地区遺跡群(5)がある。また図示はできなかったが、西唐沢遺跡の北西約3kmには、大規模な掘立柱建物跡群が発見された千葉市芳賀輪遺跡や縄文時代後・晩期の点列貝塚である千葉市野呂山田貝塚がある。

次に、分布地図に基づいて周辺地域の歴史的変遷を追ってみたい。

縄文時代早期は本遺跡を始め、近隣の多くの地点からいわゆる撚糸文土器が確認されている。しかし、いずれも表面採集や少量の出土であり、発掘調査がなされた遺跡においても遺構を伴ったり、包含層をなすほどの例はない。撚糸文土器は下総台地全域を見ても遺構を伴う例は少ないものの、少量の出土例・採集例がある。このことは単に後世の遺跡形成による攪乱だけにとどまらず、撚糸文土器社会が拠点的な集落とは別に一時的な集落を形成しながら、移動を頻繁に行っていたことを示しているのかもしれない。ただ、皿ヶ谷遺跡(3)においては道路建設による削平面から比較的まとまった量の撚糸文土器が採集されていることから、ここには拠点的な集落が存在していた可能性がある³⁾。

早期沈線文土器期から前期にかけては現在のところ芳賀輪・山田水呑の両遺跡に限定されてしまう。芳賀輪遺跡においては早期三戸式の完形品を初め、まとまった量の早期条痕文・前期土器が出土しているという⁴⁾。また、山田水呑遺跡からも三戸式土器の出土が確認される。三戸式土器は新東京国際空港周辺や利根川下流域において比較的まとまって分布することが知られているが、本地域もそのひとつとなる可能性がある。

中期になると中野僧御堂遺跡において加曾利E式期の集落とともに、大量の土器が出土している。本遺跡の南側(西唐沢南遺跡)からも、加曾利E式土器が採集されているのを初め、数地点から中期土器が採集されている。この時期に都川及び村田川流域に貝塚の形成が始まる。

後期は中野僧御堂遺跡・駒込遺跡・宮ノ台遺跡・芳賀輪遺跡から、堀之内式から加曾利B式期の住居跡が検出されている。また、鹿島川水系の野呂山田及び八反目台貝塚、都川水系の誉田高田及び川井貝塚の形成が本格化するのもこの時期である。これらの貝塚は両水系の最上流域であり、各貝塚の位置は近接している。現時点では貝層の分析データがそろっていないため、貝採集場所に関する考察はできないが、同時期に近接し、異なる水系の貝塚の関係は、当時の人々の行動を探る上で興味深い。

晩期の遺跡は、野呂山田・八反目・誉田高田・川井の各貝塚において安行3式が確認されている。これら貝塚を含む、晩期後半期に属する遺跡は現時点では未確認である。晩期の遺跡は千葉県全域を見ても発見例は少なく、不明な点が多い。

弥生時代は、市原市千原台地区では大規模な弥生時代集落の存在が明らかとなっているが、本遺跡周辺



第5図 西唐沢遺跡と周辺の遺跡

からは発見されておらず、この時代の様相は不明である。

古墳時代は、下総台地では縄文時代晩期から弥生時代にかけての遺跡の減少・断絶から一転して、古墳の築造や大規模な集落の展開が明らかとなっている。先の東南部・千原台の両地区でも古墳及び集落跡が数多く確認・調査されている。しかし、本遺跡の周辺では調査例が少ないこともあるが、中・小規模の遺跡が多くなるようである。集落跡は数軒～10軒程度で検出されることが多い。また、本遺跡の周辺には、円墳が点在していることが確認されている。

奈良・平安時代、すなわち律令期では現在の中野町付近は下総国千葉郡に属していたが、上総国山邊郡との国境に近い位置にあった。本遺跡周辺では点的に遺跡が知られるのみであるが、前出の芳賀輪遺跡の存在が特筆されよう。その遺構や遺物から7世紀以降の役所関係の遺跡である可能性が強く、西唐沢遺跡を初めとして駒込、ヲフウデン、宮ノ台、南かんみょうの各集落を統括していた中心的な存在であったものと思われる。また、東側の上総国に目を向けてみると「山邊郡印」を出土した滝台遺跡、7・8世紀の大規模な集落である山田水呑遺跡がある。そして、鹿島川を遡り分水嶺を越え、現在のJR外房線土気駅の南側には土気南地区遺跡群を初めとする大規模な遺跡群が展開している。なかでも南河原坂窯跡はロクロ土師器及び瓦の大規模な生産遺跡であり、その流通ルートの解明のなされることが期待される。山田水呑遺跡からは「中野」と記された8世紀代の墨書土器も出土している。

注1 千葉市史編纂委員会 1993 「中野町」『千葉市図誌』 千葉市

2 同上

3 中村恵次・斎木 勝 1976 『千葉市中野僧御堂遺跡』 財団法人千葉県文化財センター

4 青沼道文 1984 『千葉市芳賀輪遺跡-第2・7次発掘調査概報』 千葉市教育委員会

II 遺構と遺物

1 縄文時代

(1) 遺構 (第6図)

今回の調査ではその形態・規模から縄文時代の陥穴と考えられる土坑を3基検出した。はっきりと遺構に伴う遺物の出土がなかったことから、時期の特定はできなかった。いずれも覆土は自然堆積の様相を示していた。

002号陥穴

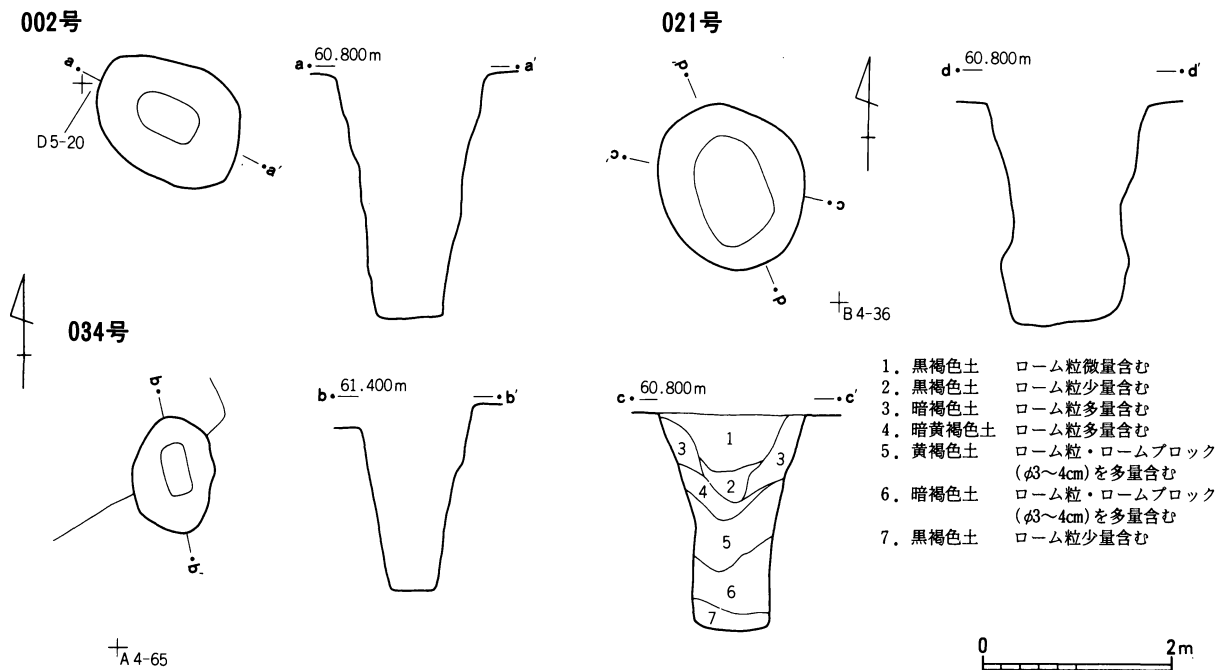
平面形は東西に長い楕円形を呈し、長軸160cm、短軸120cmほどを測る。長軸方向はN-62°-Wである。断面形は逆台形状になる。深さは250cmほどで、底面は平坦である。

021号陥穴

平面形はわずかに南北に長い楕円形を呈し、長軸170cm、短軸150cmほどを測る。長軸方向はN-27°-Wである。断面形は逆フラスコ形状になる。崩落のためか下部でやや広がりが見られる部分もある。深さは220cmほどで、底面はほぼ平坦である。

034号陥穴

平面形は南北に長い楕円形を呈し、長軸120cm、短軸90cmほどを測る。長軸方向はN-13°-Wである。後に構築された002号竪穴住居跡に上部北半は削平されている。断面形は逆台形状になる。深さは190cmほどで、底面は平坦である。

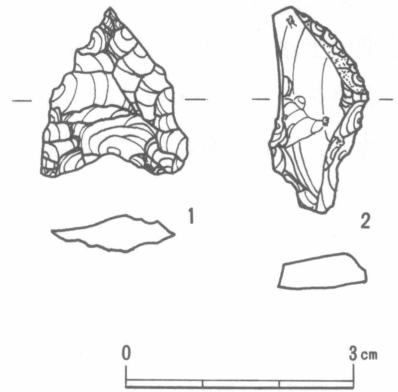


第6図 縄文時代陥穴

(2) 遺物

今回の調査で検出した縄文時代遺物は特定の区域に集中することなく、調査区全域から出土した。

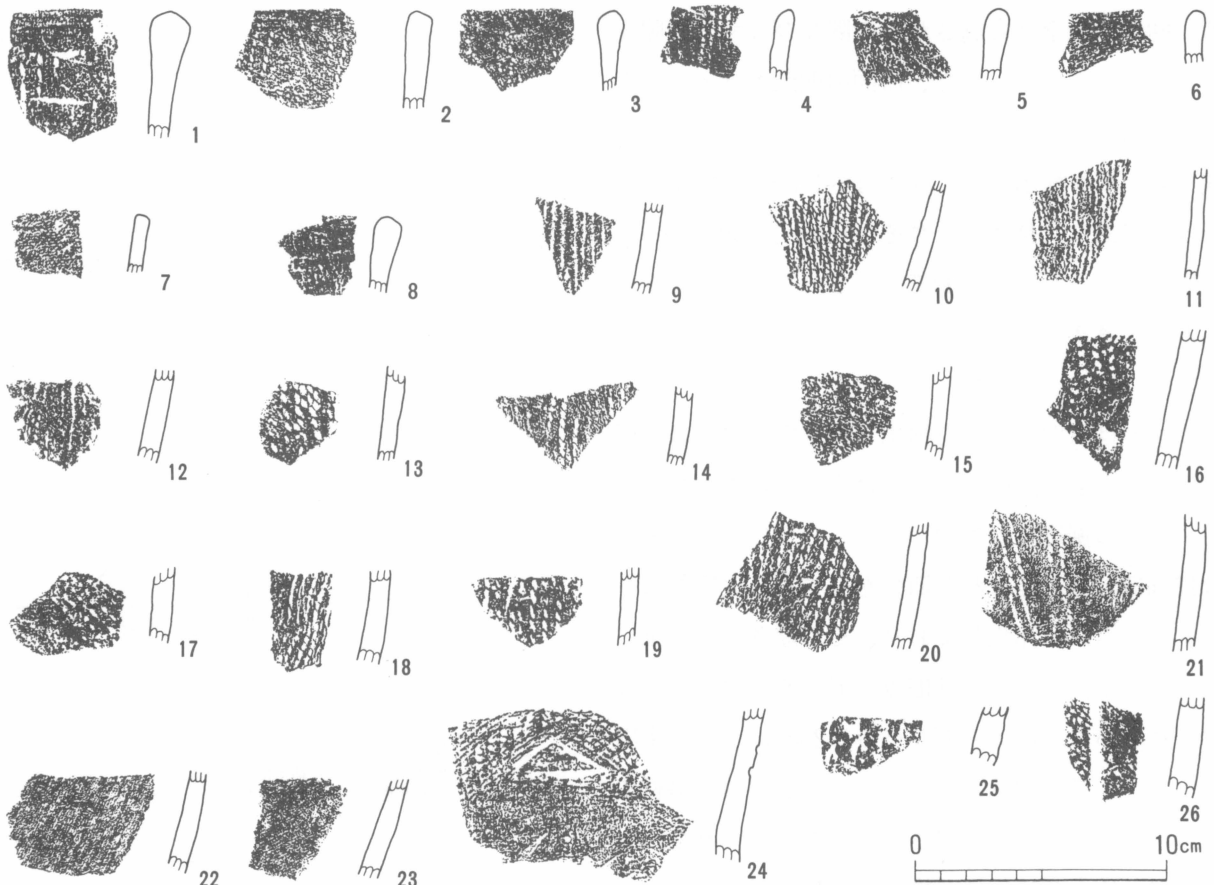
石器 (第7図) 1は石鏃である。石材はほぼ透明の黒曜石を用いる。形状はやや左右に広がり、基部の抉りは浅い。剝離時の鋭利な面が残っており、未使用品とも考えられる。2は二次加工を有する剝片である。黒曜石を用い、裏面に原石面を残す横長の第1次剝片を利用している。



第7図 縄文時代石器

土器 (第8図) 1~23はいわゆる撚糸文土器である。1~8は口縁部、ほかは胴部破片である。1は節が大きく、条がまばらな撚糸

Rを施文する。口縁部は粘土の貼り付けにより把厚する。調整はナデで、内面は特に丁寧に行い、平滑である。また、口唇部には整形時のヘラケズリで作出された低い稜が残る。胎土には砂粒を多く含む、焼成は良好である。2・3は2条ないし3条1単位の撚糸Rを鋸歯状に施文する。口縁部はわずかに肥厚し、胎土に砂粒を多く含む。4は条がまばらな撚糸Rを施文する。5・9は同一個体である。条が密な撚糸Lを施文する。口縁部は肥厚し、丸棒状の口縁部形態をなす。6・13・14は同一個体である。条のまばらな撚糸Rを施文する。胎土に混入される砂粒はほかのものに比べて少量である。調整のナデは丁寧



第8図 縄文時代土器

で、器表面は平滑である。7・8は無文である。7はほぼ角頭状の口縁部形態をなす。薄手で、器形から小型の土器と考えられる。8は口縁部が外側に肥厚し、口唇部調整にケズリを施す。内外面とも丁寧なナデ調整を行う。10・11は同一個体である。条の密な捺糸Rを施文する。胎土中の砂粒は少量である。器壁は薄く、内面の荒れにより剥落している部分もある。被熱の影響とも考えられる。ほかのものとは比べ、内面が荒れている点や器壁の薄さは異質である。12・15～21はいずれも捺糸Rを施文する。いずれも胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。22・23は同一個体である。無節の縄文Lを施文する。器表面に少量の炭化物の付着を認める。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。24・25は前期の土器である。25は浮島式土器である。波状貝殻文を施文する。24は興津式に比定される。胴部上半に貝殻文・沈線文を施文する。胎土には砂粒を多く含む。26は中期の土器である。単節縄文LR及び沈線文を施文する。加曾利E式土器である。

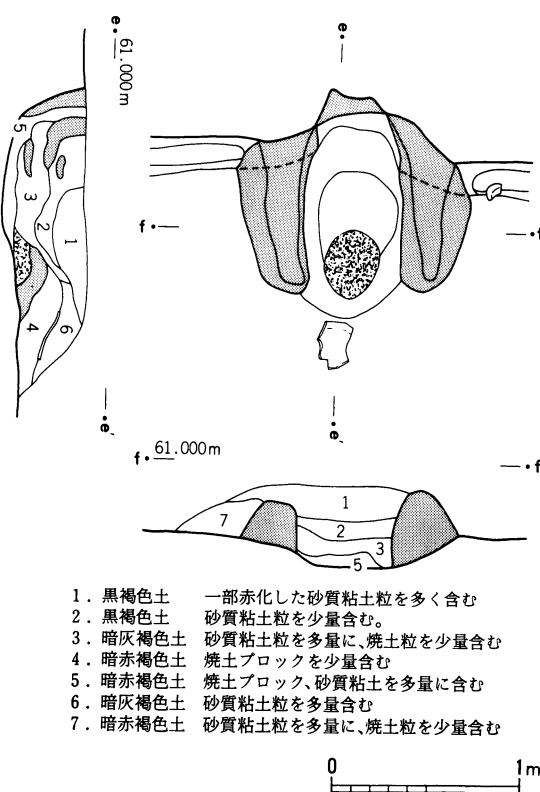
2 古墳時代

(1) 竪穴住居跡

002号竪穴住居跡（遺構：第9・10図 遺物：第11図）

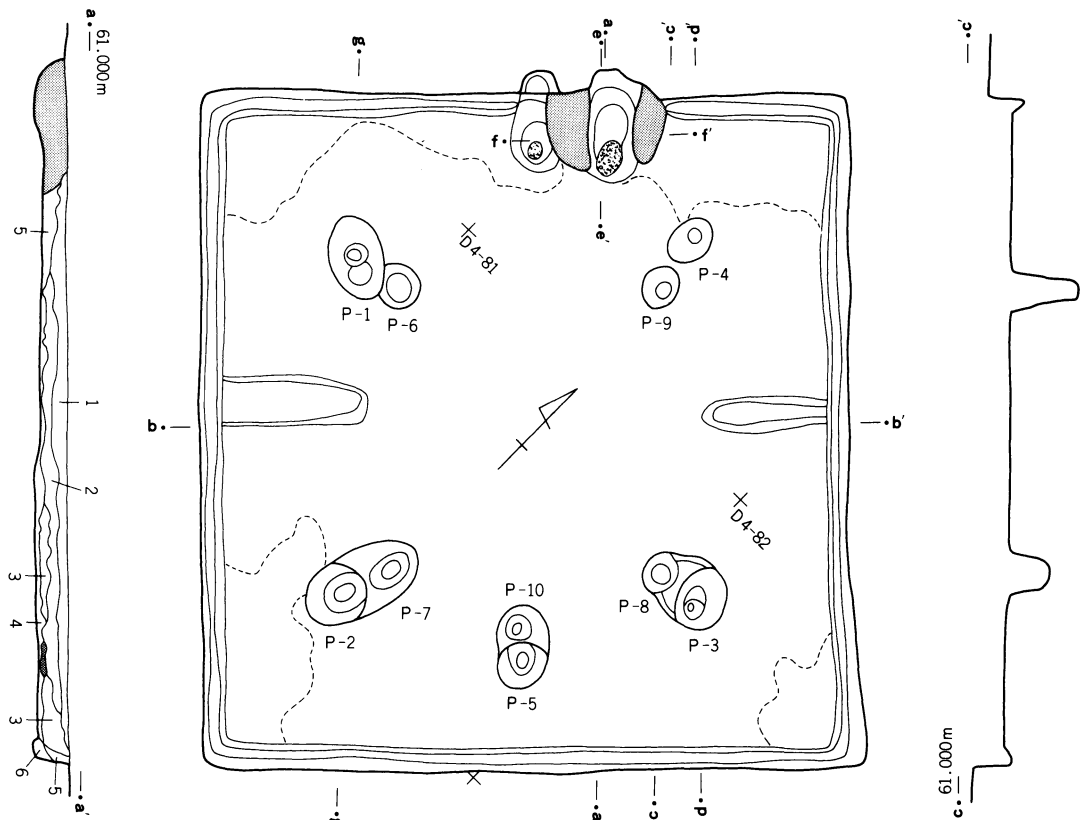
調査区東側D4-81グリッド付近に位置する。主軸方位はN-45°-Wを示す。平面形は一辺約7.0mの正方形を呈している。壁高は30cm～35cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周し、幅は15cm～20cmである。支柱穴は4本1組のものが2組確認できる(P-1～4とP-6～9)。同様に入口施設に伴うピットも2基検出した(P-5・10)。住居を拡張した結果と考える。深さは外側のものが30cm～45cm、内側のものが20cm～40cmである。貼床は床全面に施され、四隅及びカマド両脇を除き硬化している。また、床面の凹凸もほとんどない。東西両壁の中央部付近に、主軸方向に直交する浅く短い溝を検出した。深さは約10cm、幅20cm～45cmほどであり、長さはそれぞれ120cm、150cmである。住居空間を分割する目的で設置された「間仕切り」であると考えられる。覆土は自然に埋没したものであろう。

カマドは新旧の2つを検出した。旧カマドは北壁のほぼ中央部に設置され、袖は完全に除去されていた。壁への掘込みは半円形を呈し、焚口から火床部は12cmほど掘り込まれた皿状を呈する。火床部はハードローム面が赤化しており、その厚さは約5cmに及んでいた。新カマドは旧カマドのやや東寄りに設置されている。壁への掘込みは25cmほどで、半円形をなす。壁の掘込み面には、煙出し部の構築材である粘土が10cmほどの厚さをもって認められた。火床部には焼土が15cmほど堆積し、10cmほどの掘込みを持つ。袖部は、左袖がやや崩れていたが、右袖は

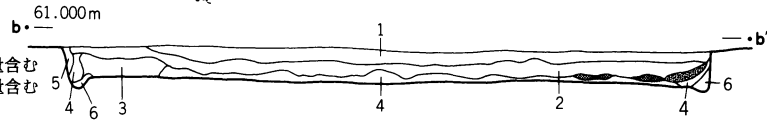


1. 黒褐色土 一部赤化した砂質粘土粒を多く含む
2. 黒褐色土 砂質粘土粒を少量含む。
3. 暗灰褐色土 砂質粘土粒を多量に、焼土粒を少量含む
4. 暗赤褐色土 焼土ブロックを少量含む
5. 暗赤褐色土 焼土ブロック、砂質粘土を多量に含む
6. 暗灰褐色土 砂質粘土粒を多量含む
7. 暗赤褐色土 砂質粘土粒を多量に、焼土粒を少量含む

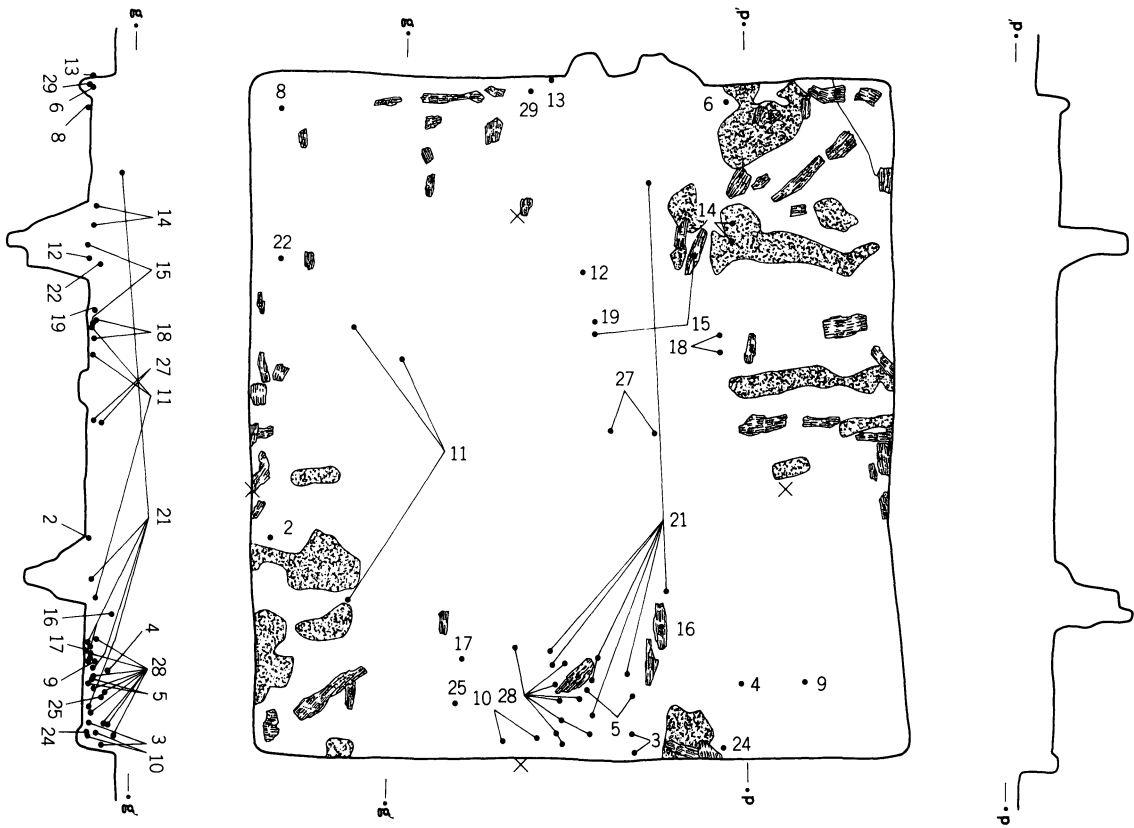
第9図 002号竪穴住居跡カマド



- 1. 黒褐色土 ローム粒微量含む
- 2. 暗褐色土 ローム粒少量含む
- 3. 黒褐色土 ローム粒、炭土粒少量含む
- 4. 黄褐色土 ローム粒、炭化物多量含む
- 5. 黒褐色土 炭化物少量含む
- 6. 黄褐色土 ローム粒多量含む



0 2m



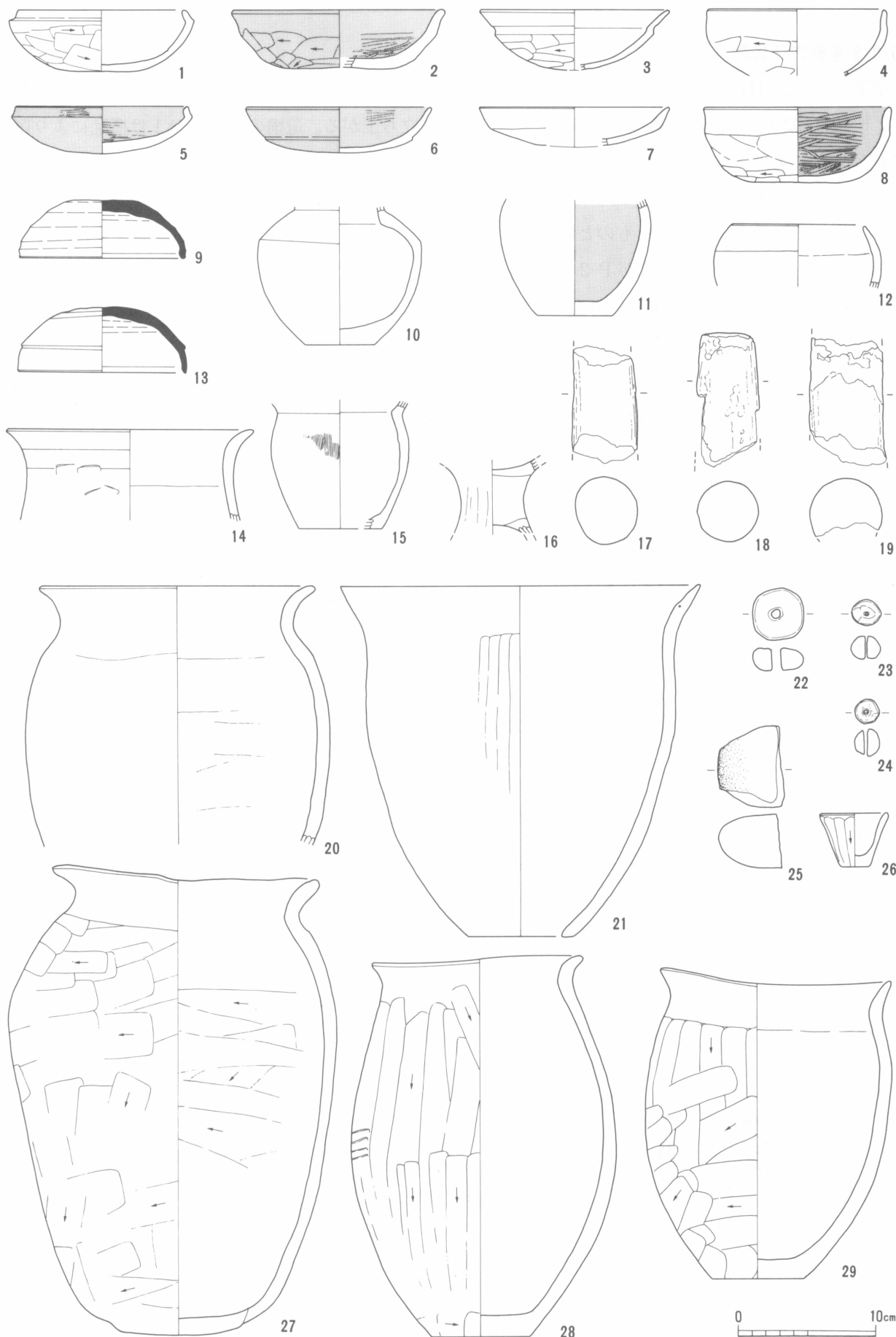
第10図 002号竪穴住居跡

良好に残存していた。カマド内堆積土中には天井部が崩落したと思われる粘土が部分的に堆積している。

炭化物・焼土を、主に住居の壁際で検出した。セクション図に示されるとおり、6層から3層の堆積後に生成されたものである。さらに中央部付近には炭化材、焼土のまとまりを認めなかったことから、住居がある程度埋没してから焼却等を行った結果と考える。出土遺物の分布も同じような傾向を認めた。中央部付近には少なく、壁に近い位置で床面よりもわずかに高いレベルに分布している。遺物全体の数から見ると、床面直上のものはごく少数であった。住居廃絶後の投棄あるいは流れ込みによる遺物が大半を占めるものとする。

出土遺物のうち、図示できたものは29点である。内訳は土師器杯8点、土師器甕9点、須恵器蓋2点、土師器高杯1点、小型土器1点、土玉3点、土製支脚3点、磨石(?)1点である。

1～8は土師器杯である。1・5は外面に明確な稜をもち、口縁部は内傾する須恵器杯身模倣杯である。1は体部が深く、体部外面はヘラケズリ調整を施す。口縁部内外面は横ナデ、体部内面はヘラナデ調整を施す。5は内外面に黒色処理を施す。体部は浅く、全体として偏平な作りである。外面口縁部及び内面に細いヘラを用いるミガキ調整を施す。外面体部は丁寧なナデで平滑に仕上げる。2～4・6～8は須恵器杯蓋模倣杯である。2・4・8は口縁部の横ナデと体底部のヘラケズリにより弱い稜を作出する。底部は平底気味である。口縁部付近の形態は、2はやや開き気味に立ち上がるが、4・8は直線的に立ち上がる。2は内外面、8は内面に黒色処理を施し、いずれも内面にミガキを施す。3・6・7は口縁部と体底部の境の稜が明確であり、口縁部は外側に開いている。3は体底部が丸みを帯び、口縁部は大きく外側に開く。6・7は偏平な器形で平底気味である。6は内外面に黒色処理、外面口縁部及び内面にミガキを施す。9・13は須恵器杯蓋である。9はロクロ整形、ヘラ切り離しの後、天井部に粗いヘラナデ調整を加える。胎土に直径1mm～3mmほどの小石を多く混入する。13は天井部を回転ヘラ削りによって調整する。体下部には明確な稜を持ち、稜からはほぼ垂直に下降する。10・11は土師器小型壺である。10は肩部に弱い稜を作出し、器表面を丁寧にナデ調整する。11は内面に黒色処理を施す。12は土師器碗である。口縁部内外面に横ナデを施す。内外面に黒色処理の痕跡を認める。16は高杯の脚部である。脚を太く、短く作出し、ヘラナデで仕上げる。杯部内面は丁寧にナデを施し、平滑である。15は土師器小型甕である。胎土に長石粒を多く混入することから常陸産であるとする。器面調整はおおむねナデであるが、体上部に縦方向の細かいハケ目を残している。10は頸部、11は体上部がそれぞれ欠損しているため、全体の様相は不明である。14・20・27～29は土師器甕である。14は口縁部に横方向のヘラナデを施し、胴部に縦方向のヘラナデを施す。20・27～29は胴部にふくらみを持ち、口縁部が外湾する器形である。27～29は体部外面にヘラケズリを施す。27は底部がやや丸みを帯び、胴中から下部は黒く焦げついている。底部付近は赤みを帯びる。内面にはヘラナデを施す。28・29は平底をなす。28は破片によって色調が違うことから、廃棄後に火熱を受けていると考える。21は甗である。胴部がやや膨らむものの、口縁部が朝顔形に開き、最大径は口縁部にある。全体に軟質であり、器表面の磨耗が激しい。26は土師器の小型土器である。盃形に手捏ねで制作し、外面を縦方向のヘラケズリで調整する。22は土製紡錘車である。断面は楕円形をなす偏平な作りである。23・24は土製丸玉である。どちらも先尖状の工具を用い、片側からの刺突で孔を形成する。17～19は土製支脚の破片である。焼成がやや異なるものの、同一個体であると思われる。18は先端部であり、上面は平坦である。19は下端が広がり始めていることから、基部に近い部分であるとする。

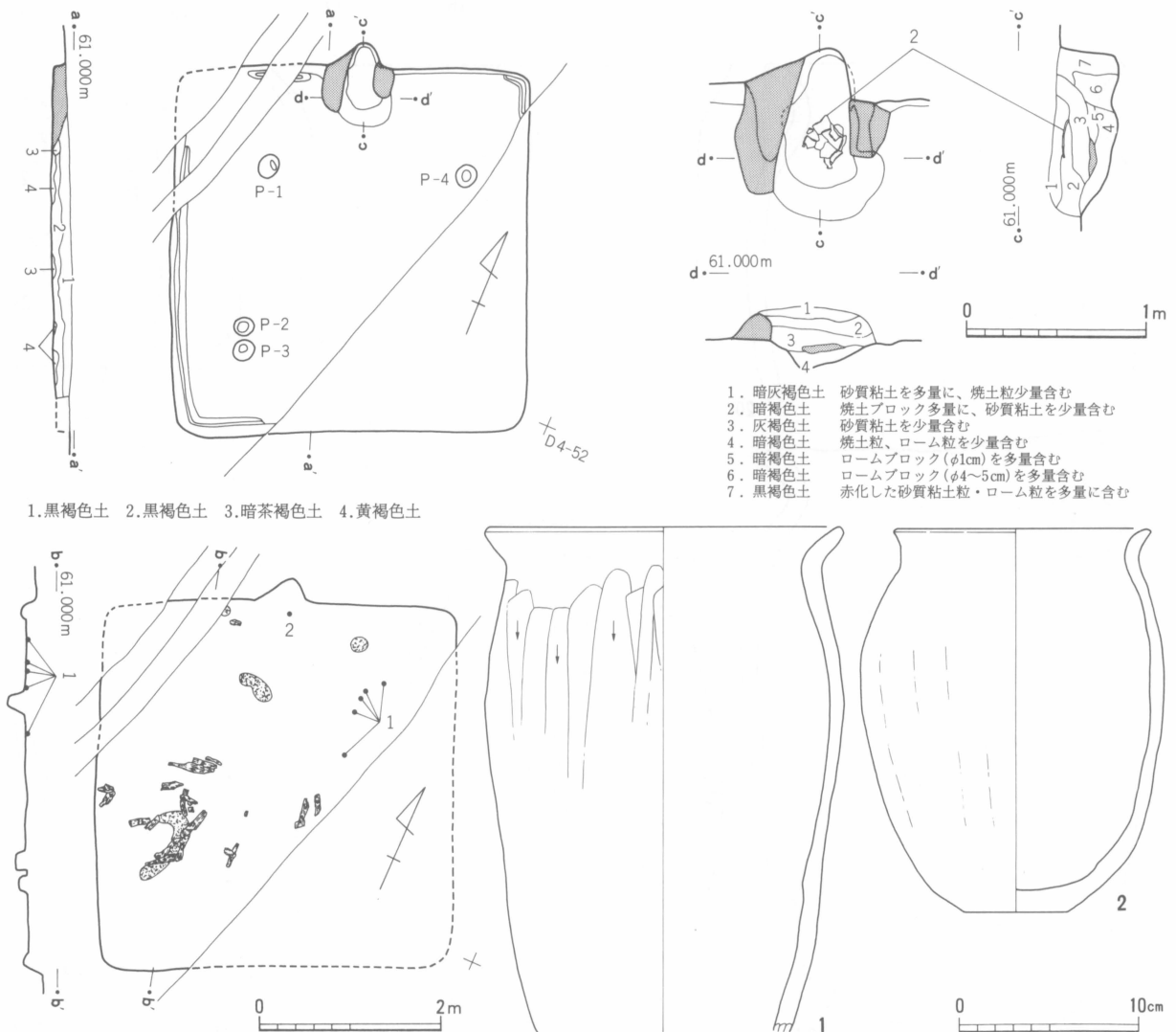


第11图 002号竖穴住居跡出土遺物

003号竪穴住居跡 (第12図)

調査区の東側D4-41グリッド付近に位置する。主軸方位はN-25°-Wを示す。平面形はほぼ正方形を呈し、一辺は約3.9mを測る。壁高は約15cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。遺構の約3分の1は攪乱により削平されていた。また、確認面もソフトローム層がほとんど確認できなかったことから、すでに削平されていたと思われる、本来の壁高はもっと高かったものとする。周溝は確認できなかった部分が多かったものの、カマド周辺を除き全周していたものとする。幅は約10cm、深さ約7cmを測る。主柱穴は4本になるものと考えられるが、南東部の柱穴がP-2、P-3のどちらかになるのかは不明である。深さはP-1が22cm、P-2が11cm、P-3が9cm、P-4が16cmを測る。いずれも抜き取り痕らしきものは認められなかった。床面には多少の凹凸が認められた。貼床は全面に認められるが、硬化している部分は認められず全体に軟弱であった。

カマドは北壁のほぼ中央部に位置し、壁への掘込みは25cmほどで長円形を呈する。袖は床面と同じ高さに構築されている。左袖は良好に残存していたが、右袖はその大半が崩れてしまっていた。焚口から火床部は25cmほど掘り込まれており、凹凸に富む。煙道部へはほぼ垂直に立ち上がっていく。また、内部堆積



第12図 003号竪穴住居跡及び出土遺物

土の上部から土師器甕(1)を検出した。

床面付近から炭化物・焼土を少量検出した。炭化物は南西部に偏る傾向がある。遺物はごく少量であり、その大半は小破片である。しかし、図示した2点はカマド内及び床面直上であり、住居の使用時期にほぼ近いものとする。2はカマド中央部付近の覆土上部から検出されたことから、カマド廃棄に伴いこの場所に置かれたものとする。

遺物は2点のみが復元可能であった。1・2とも土師器甕である。1は口縁部から胴部にかけて70%ほど残存し、底部は欠損していた。口縁部及び胴上部に最大径を持ち、胴部の膨らみは少なく、寸胴に近い形状をなす。胴上部にケズリ調整の痕跡を認めるが、胴部の大半及び内面は丁寧なナデ調整を行っている。2は最大径を胴部にもつものの、膨らみは顕著でない。全体的に整形は粗雑であり、形にゆがみがある。外面をヘラケズリの後、丁寧にナデ調整する。

004号竪穴住居跡(第13図)

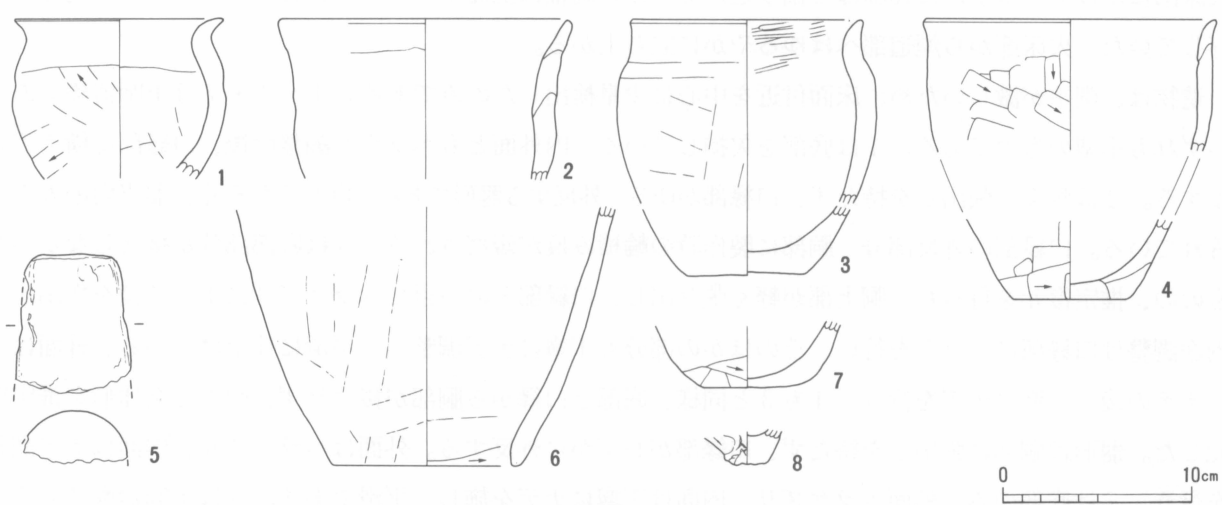
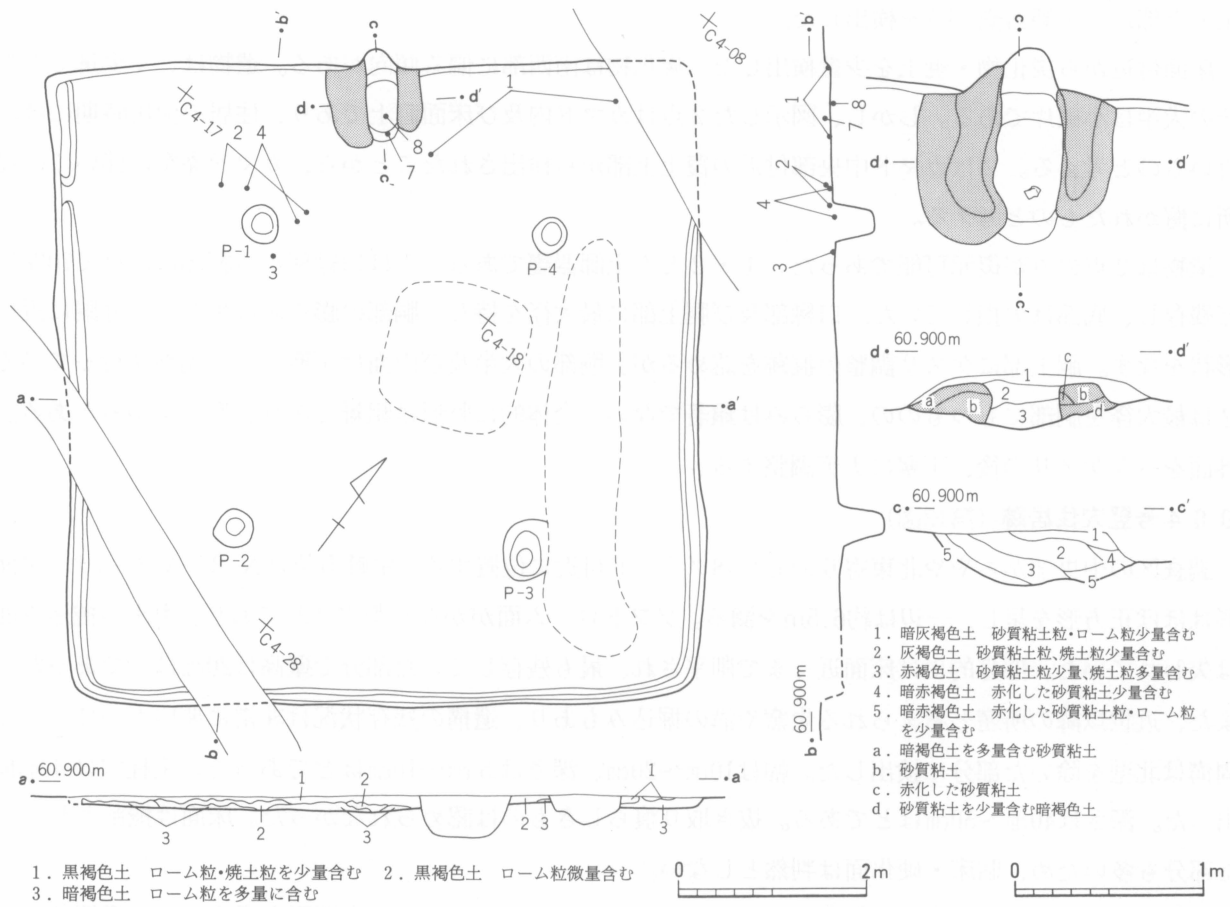
調査区の中央部からやや北東寄りのC4-18グリッド付近に位置する。主軸方位はN-37°-Wを示す。平面形はほぼ正方形を呈し、一辺は約6.5mを測る。ソフトローム面がかなり削平されており、本来の掘込み面は失われていた。部分的には床面近くまで削平され、最も残存していた部分で壁高は20cmほどであった。また、近世以降の所産と考えられる炭窯や溝の掘込みもあり、遺構の残存状況は非常に悪いものであった。周溝は北壁を除いた部分に検出した。幅は10cm~20cm、深さは5cm~10cmほどであった。支柱穴は4本検出した。深さは40cm~50cmほどである。抜き取り痕らしきものは認められなかった。床面は攪乱されていた部分が多いため、貼床・硬化面は判然としない。

カマドは北壁のほぼ中央部に位置し、壁への掘込みは20cmほどであり、半円形を呈する。袖構築部から火床部にかけてゆるやかに10cmほど掘り込んでいる。両袖は上面がやや削平されていたものの、良好に残存していた。火床部から煙道部へはゆるやかに立ち上がる。

遺物は、削平が激しいため、床面付近を中心に少量検出したのみである。1~4・7は土師器甕である。いずれも小型のものである。1は底部を欠損している。内外面ともヘラナデ調整の後、口縁部を横ナデ調整する。2は胴部に張出しを持たず、口縁部がゆるく外反する器形である。胎土はもろく、器表面の大半が荒れている。口縁部の外反部分、胴部に製作時の輪積み痕が観察される。3は底部部分が接合しなかったものの、推定復元を行った。胴上部が軽く張り出し、口縁部との境目にヘラケズリによって稜を作出する。内面調整は口縁部はミガキを行い、そのほかの部分も丁寧にナデ調整し、平滑に仕上げている。外面はヘラナデの後、丁寧にナデを行う。4も3と同様、底部と口縁から胴部が接合せず、図上で全体形を推定復元した。器形は胴部に張出しを持たず、口縁部がわずかに外反する。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整を行う。7は底部のみ。外面ヘラケズリ、内面は丁寧にナデを施し、平滑である。6は土師器甕である。外面にヘラナデ、内面にナデを施す。8は手捏土器の底部である。全体に粗雑な作りで指頭圧痕、粘土の継ぎ目を顕著に残す。5は土製支脚である。胴部は平坦であり、断面は円形になると考える。器表面は製作時の凹凸を顕著に残すものの、丁寧にナデを施している。

005号竪穴住居跡(第14図)

調査区の西側B4-85グリッド付近に位置する。主軸方位はN-33°-Eを示す。覆土は暗黄褐色土・暗褐色土が皿状に堆積しており、自然埋没であったと考える。平面形はやや南北に長い長方形を呈し、短軸約3.5m、長軸約3.7mを測る。壁高は30cm~35cmほどで、ゆるやかに立ち上がる。柱穴はなく、南壁中央部近く



第13図 004号竪穴住居跡及び出土遺物

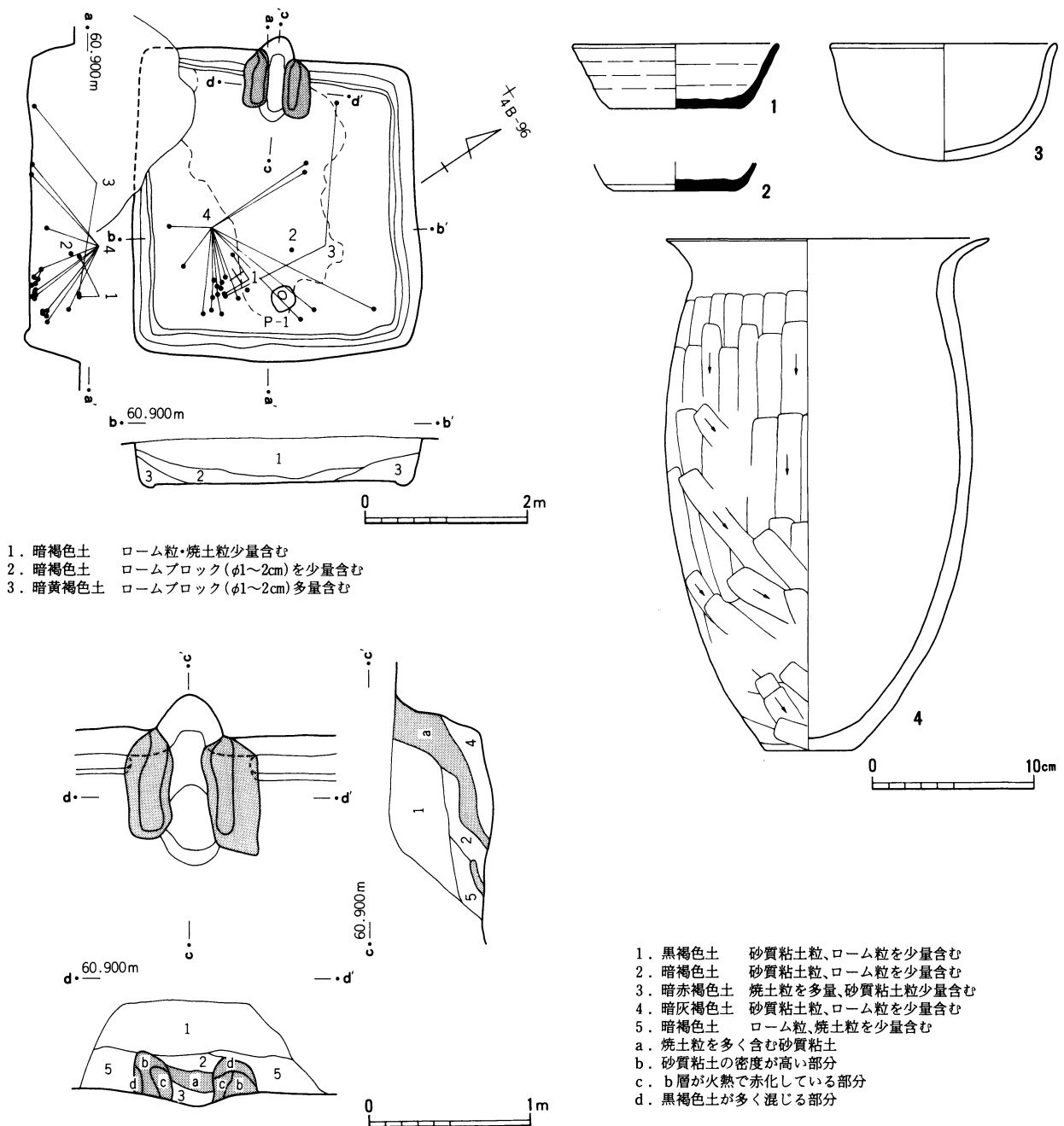
に入口施設に伴うものと考えられるピット(P-1)を検出した。深さは20cmほどである。貼床はほぼ全面に認められ、硬化面はカマド付近から住居中央部、P-1付近に広がる。床面はほぼ平坦である。

カマドは北壁のほぼ中央部に位置する。壁への掘込みは20cmほどであり、半円形を呈する。火床部の掘込みは、袖部分からゆるやかに10cmほどである。両袖は良好に残存し、崩落した天井部分もカマド内堆積土中から確認することができた。火床部から煙道部へは垂直に近い形で立ち上がっている。

遺物の出土状況は覆土中に少量の破片を検出したのみである。その大半が1層中のものであり、分布も

南西部に偏っている。したがって、検出した遺物の大半は住居廃絶後、2層の堆積中に流れ込んだものと考えられる。1・2は1層の上面からのみ検出したことから住居の時期を表すものではないと考える。

遺物は4個体を復元実測した。1・2は須恵器杯である。いずれもロクロで整形する。1は底部及び体部外面下端部は手持ちヘラケズリを施す。2は外面体部下端部を回転ヘラケズリで調整した後、回転ヘラ切り離しを行う。焼成時の還元が不十分であり、色調は赤みを帯びる。3は土師器鉢である。ゆるやかな丸底をなし、口縁部はわずかに外反する。器表面が荒れているため調整は不明瞭であるが、内外面ともに丁寧なナデを施しているようである。4は土師器甕である。胴部の膨みは弱く、口縁部が大きく外反する。外面は主に縦方向のヘラケズリによって調整される。内面は丁寧なナデを施す。



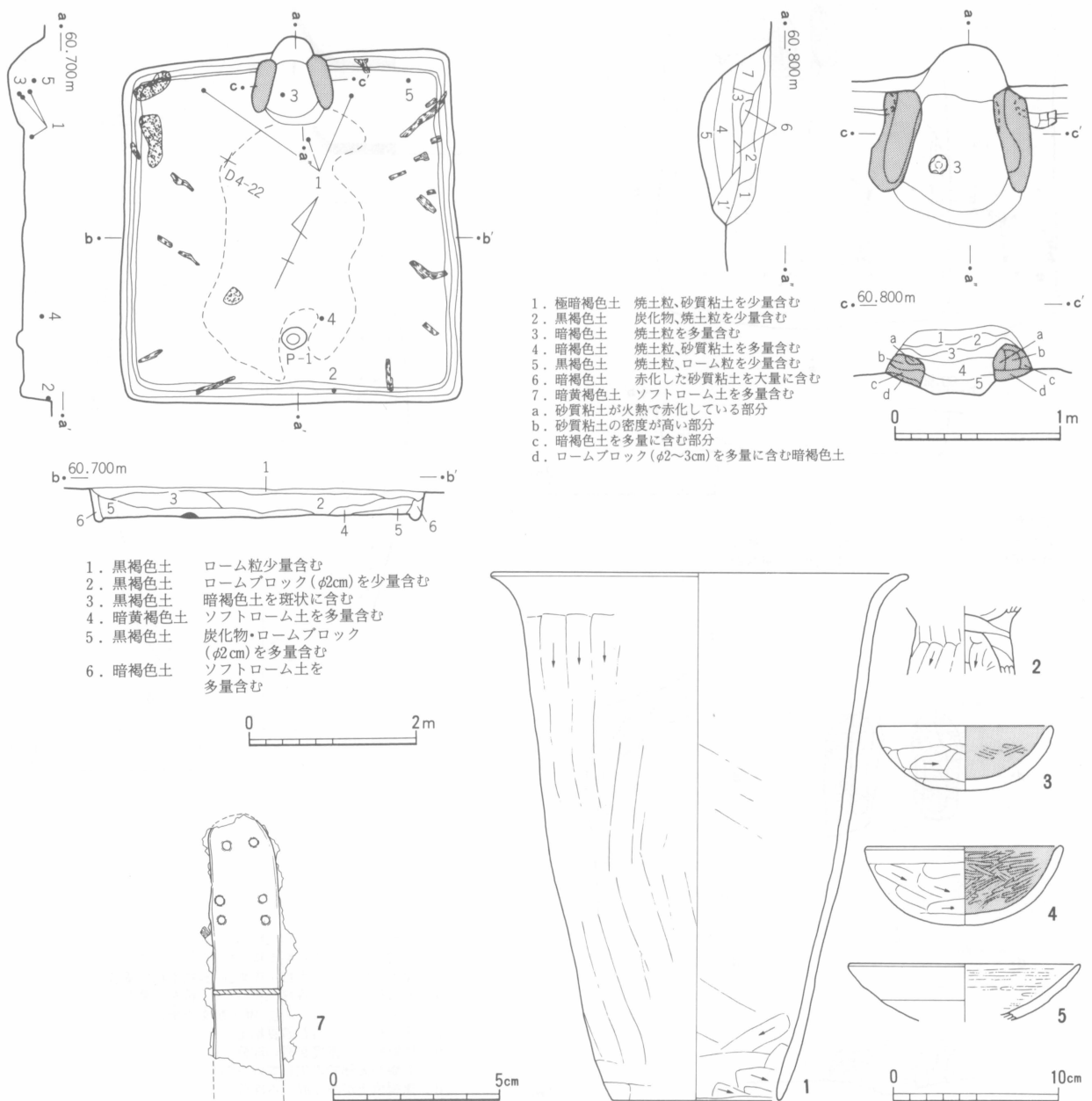
第14図 005号竪穴住居跡及び出土遺物

010号竪穴住居跡 (第15図)

調査区の東側 D4-22グリッド付近に位置する。主軸方位はN-27°-Wを示す。平面形は一辺約4.0mの正方形を呈する。壁高は約30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴らしきものは検出しなかった。P-1は入口施設に伴うピットであると思われる。深さは32cmほどである。周溝は認めることができなかった。貼床は全面に施される。硬化面はP-1付近からカマドにかけて認められるのみである。

カマドは北壁の中央部付近に位置する。壁への掘込みは20cmほどで、半円形を呈する。火床部の掘込みは袖部分よりゆるやかに15cmほどである。両袖は良好に残存する。火床部から煙道部へはゆるやかに立ち上がっている。

遺物の出土状況はカマド周辺に本遺構に伴うと思われる遺物を若干検出した。そのほかは大半が覆土上



第15図 010号竪穴住居跡及び出土遺物

層からであり、床面直上のものはほとんど見られなかった。また、床面よりやや高い部分に若干の焼土及び炭化材を検出した。そのほとんどは壁面近くに分布する。住居廃絶時ないしは廃絶後さほど埋没しないうちに生成されたものと考えられる。

遺物は6点を図示した。1は土師器甕である。胴部の張出しはなく、口縁部で急激に外反する。器表面が磨耗しており、器面調整ははっきりとしないが、外面は主に縦方向のヘラケズリを施す。内面は主にヘラナデ、下部にヘラケズリの痕跡を認める。2・5は高杯である。2は高杯の脚部で、内外面にヘラケズリを施す。器形の変換部となるためか、輪積み痕が幾重にも観察される。5は口縁部破片。内面にミガキを施し、調整の違いによって外面に低い稜を作出する。3・4は土師器杯である。口縁部と体部の境には稜を持たず、丸底をなす。いずれも内外面にミガキ・黒色処理を施す。外面はヘラケズリで整形し、口縁部に横ナデを施す。6は鉄製小札である。下半と上端部を欠損している。現存重量12.45g、現存長7.7cm、最大幅2.1cm、孔径0.2cmである。孔は3対確認できるが、いずれの孔にも釘などの痕跡は残っていない。一部に植物繊維のような圧痕が見られるが、直接小札に関わるかは不明である。

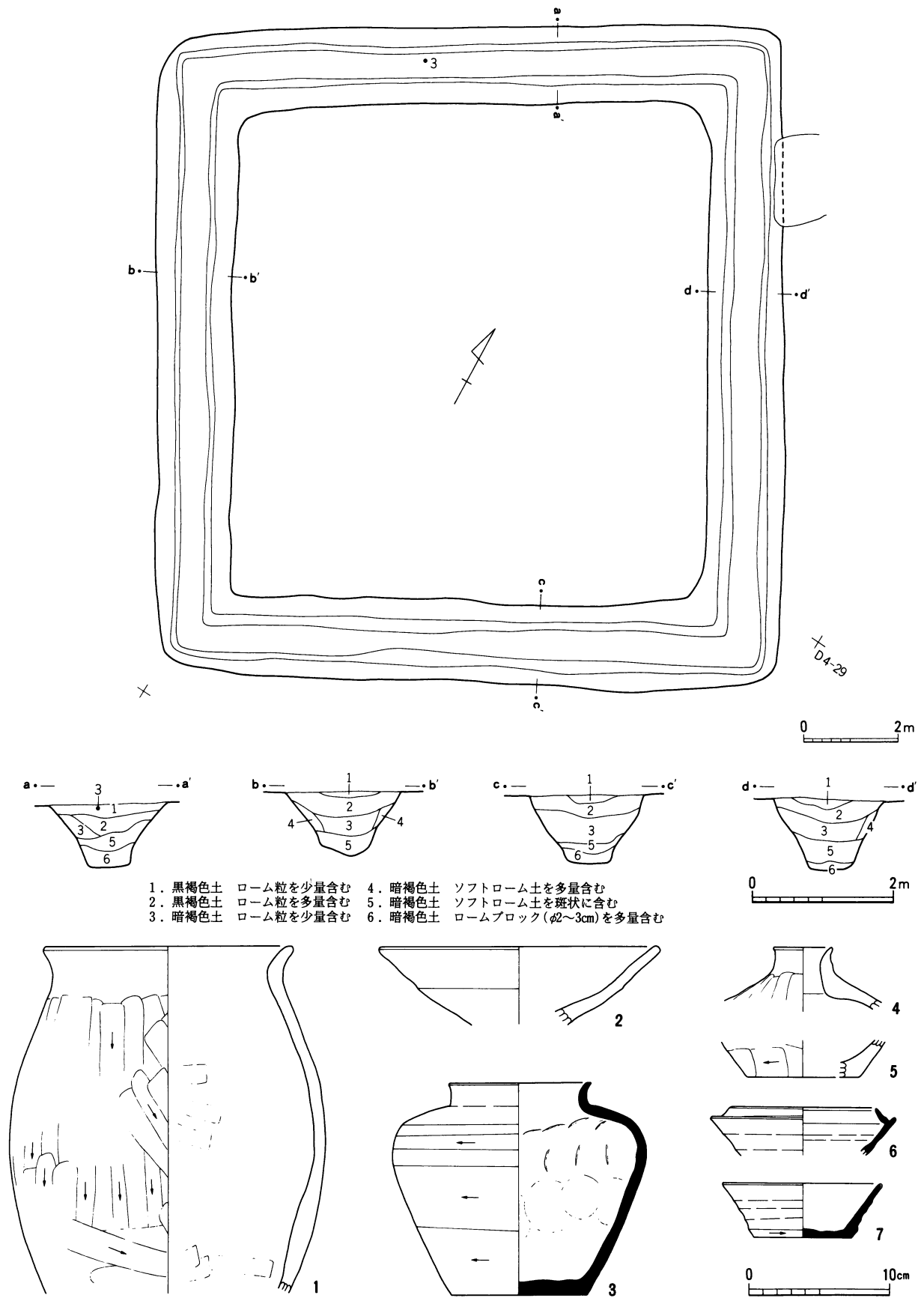
(2) 古墳

001号方墳(第16図)

調査区の東側D4-95グリッドからD5-28グリッドにかけて位置する小型の方墳である。主軸方位はN-30°-Wを示す。前述したように、調査区の東側はソフトローム面まで削平されており、周溝のみの検出である。墳丘及び埋葬施設を確認することはできなかった。平面形はほぼ正方形を呈し、周溝外縁で計測して一辺13.4m、周溝内縁で10.1mほどである。周溝の上面幅は1.5m～1.7m、下面幅は約60cm、深さ90cm～100cmを測る。周溝の断面は逆台形状を呈す。壁は深さ40cm～60cmのところまでは垂直に近い角度で立ち上がるが、それより上はゆるやかに立ち上がっている。下底面は多少の凹凸が認められるものの、ほぼ平坦である。壁面・下底面とも掘込みは明確である。周溝南辺中央部の下底面から、少量の粘土を検出した。しかし、極めて部分的であり、またその周辺に掘込みを見出すこともできなかった。

周溝内から土師器・須恵器片を多数検出したが、いずれも覆土上部からの出土である。遺構の時期を直接示すものとは考えにくい。

遺物は7点を図示した。1は土師器甕である。最大径は胴部の中央部付近にあると思われる。口縁部の外反はゆるやかで、稜も形成されない。外面は縦方向のヘラケズリによって調整する。内面はヘラナデを施す。2は高杯の杯部である。外面に調整によって低い稜を作出し、内面は丁寧にナデを施す。3は須恵器短頸壺である。タタキによって整形し、外面を横方向のヘラケズリによって調整する。内面にはヘラナデを施す。外面はほぼ全面に、内面は底部付近に自然釉が付着する。4は土師器の細頸壺である。口縁部から胴上部のみの出土であり、全体の器形は不明である。口縁部付近横ナデ、以下はヘラケズリを施す。5は土師器甕の底部である。外面ヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。6・7は須恵器杯である。6は明確な返りを有する。肩部からはかなりの急角度で底部へと移行する器形になると思われる。外面はロクロ痕を残すものの、丁寧にナデを施し平滑である。7は体部下端を回転ヘラケズリで調整し、底面を手持ちヘラケズリを施す。体部外面は無調整であるが、内面にはナデを施す。胎土には直径1mm～2mmの白色粒子を多量に含んでいるため、ヘラでの調整部は粒子がえぐれて剥落し、凹凸に富む。



第16図 001号方墳及び出土遺物

3 奈良・平安時代以降

(1) 竪穴住居跡

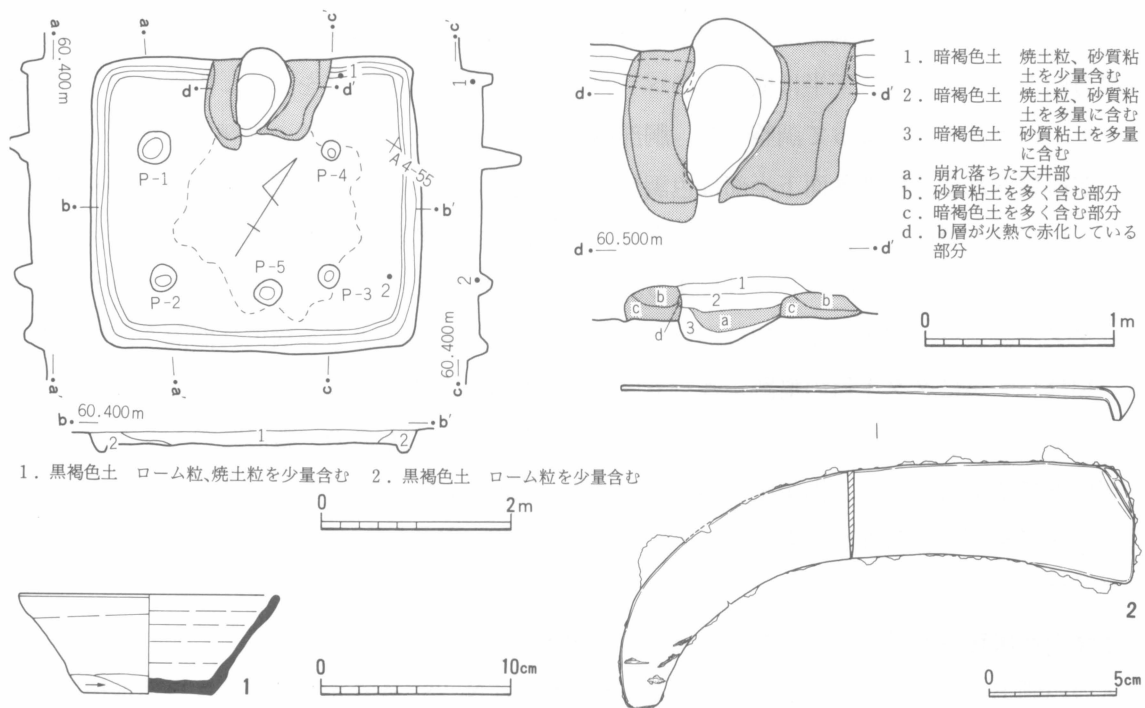
001号竪穴住居跡 (第17図)

調査区の西端 A4-54グリッドに位置する。主軸方位はN-32°-Wを示す。平面形はやや東西方向に長い長方形を呈し、長軸約3.5m、短軸約3.0mを測る。壁高は約15cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は全周し、幅約10cm~15cm、深さ約10cmを測る。支柱穴は4本(P-1~4)で、南側に入口施設に伴うと考えられるピット(P-5)を検出した。深さはP-1・2が約20cm、P-3が16cm、P-4が40cm、P-5が16cmを測る。いずれも抜き取り痕らしきものは認められなかった。貼床は床面全面に認められ、柱の内側を中心に硬化している。

カマドは北壁の中央部からやや東寄りに位置し、壁への掘込みは半円形を呈している。両袖は遺存しているものの、上部が崩れてしまっているためか、断面は偏平で高さも低い。袖は床面と同じ高さに構築されている。焚口から火床部は15cmほど掘り込まれた皿状を呈し、煙道部はゆるやかに立ち上がっていく。内部堆積土層には天井部が崩落したと思われる部分が残存していた。

遺物は破片総数が42点と極めて少数であり、器形復元が可能なものは須恵器杯1点のみである。カマドの右袖に隣接した位置から検出した。また、東壁近くの床面から鉄製鎌を検出した。

出土遺物で図示できたものは以下の2点である。1は須恵器杯である。焼成時の還元が不十分で、特に底部付近の色調は赤みを帯びている。断面形を見ると口縁部と体部下端がやや厚みを持つ。外面はナデ、体部下端及び底面は手持ちヘラケズリにより調整する。2は鉄製鎌である。全長は21.2cmを測り、現存重量は95.9gである。刃部の長さは15.5cm、背厚は基部が0.4cm、先端部が0.2cmである。曲刃鎌であり、基部4.0cmを残して刃部が作出される。着柄部は基部上半のみを斜めに折り曲げているが、木柄の痕跡はない。



第17図 001号竪穴住居跡実測図及び出土遺物

006号竪穴住居跡（第18図）

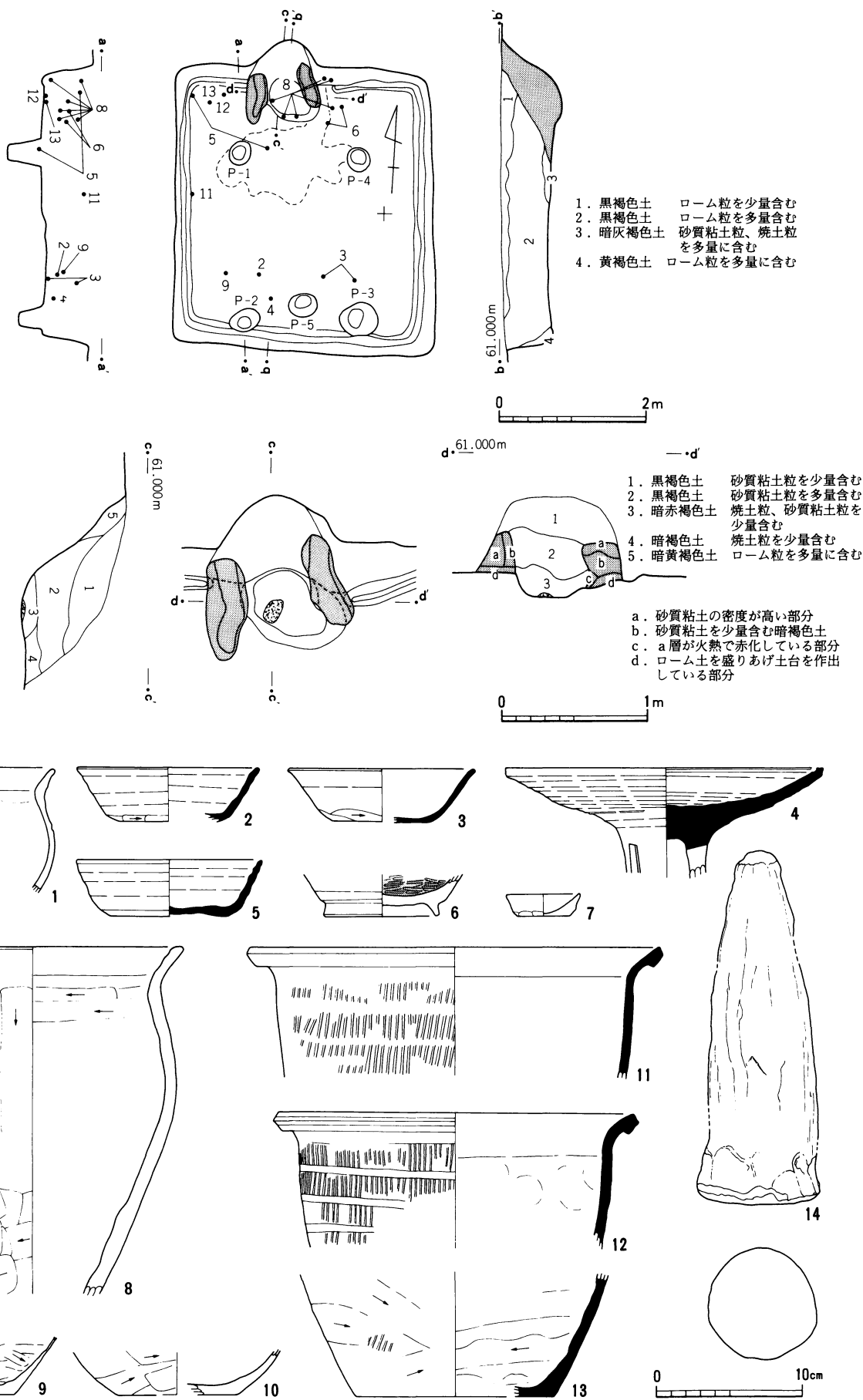
調査区の西側 B4-64グリッド付近に位置する。主軸方位はほぼ座標北である。覆土は黒褐色土が一挙に堆積した様相を示すが、自然堆積であると考え。平面形はやや南北が長い長方形を呈し、約3.5m×3.8mを測る。壁高は約60cmで、ゆるやかに立ち上がる。主柱穴は4本検出した。南側の2本(P-2・3)は壁に近接して構築されている。深さはP-1・3が50cm、P-2が30cm、P-4が42cmである。南壁中央部付近には入口施設に伴うと考えられるピット(P-5)を検出した。深さは20cmほどである。周溝はカマド部分を除き全周する。幅は15cm～20cm、深さは5cmほどである。貼床は全面に認められるものの、硬化面はP-1・4付近からカマド周辺の比較的狭い範囲に認めたにすぎない。床面はほぼ平坦である。

カマドは北壁の中央部からやや西寄りに位置する。壁への掘込みは35cmほどであり、半円形を呈する。火床部の掘込みは、深さ約30cmである。主に袖の内側から急激に掘り込んでいる。火床部から煙道部へはゆるやかに立ち上がっている。

遺物は図示したもの以外にも破片総数で535点が出土した。床面からの出土は少なく、大半が覆土中からの出土である。だが、図示した遺物や比較的大きな破片はカマド周辺からの出土が多い。住居廃絶時にカマド周辺部に意図的に遺物を残していった結果であると考え。2・3・5は須恵器杯である。いずれも焼成時の還元が不十分なものである。3は特に色調の赤みが強い。2・3は体部下端及び底面は手持ちヘラケズリによって調整する。3は内外面ともナデを施し、ロクロ痕をほとんど残していない。5は回転ヘラケズリによって体部下端及び底面を調整する。4は須恵器高杯である。杯部と脚部の上部のみが残存していた。杯部は内外面ともロクロ痕を顕著に残し、脚部は横ナデにより調整する。脚部には透かしが施されている。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。6は土師器高台付杯である。内面はミガキ・黒色処理を施す。外面は高台を付けた後に横ナデにより調整する。1は土師器小型甕である。胴部に膨みを持ち、口縁部はゆるく外反する。外面胴部にヘラケズリを施す。8・9・10は土師器甕である。9・10は底部のみの復元である。8は胴上部に張出しを持つものの、最大径は口縁部にもつ。外面調整として胴部上半は縦方向のヘラケズリ、下半は横方向のヘラケズリ、口縁部は横ナデを施す。内面頸部付近は横方向のヘラナデ、以下はナデによって調整する。胴部内面にはところどころ火熱の影響で赤化し、ひび割れている部分が観察される。胴部外面下半部は色調が黒みを帯びるが、上半は褐色を呈する。11～13は須恵器甕である。いずれも焼成時の還元が不十分である。11・12は口縁部～胴上部のみ、13は底部付近のみの復元である。11・12は口縁部が肥厚し、外反する。胴部の張出しは弱く、バケツ形になるものと考え。頸部以下はタタキによって成形する。12は細いヘラ状工具による帯状のナデを横位に間隔を開けながら加えている。13はわずかにタタキ目の痕跡が残っている。内面はヘラナデを施す。14は完形復元をした土製支脚である。上方へ行くほど細くなる形を呈す。器表面は荒れているものの、整形時のヘラケズリの痕跡が残る基部付近でやや太くなり、指頭圧痕が残っている。底面はほぼ平らである。7は土師器小型土器である。皿状の器形を呈し、内外面とも丁寧なナデを施し、平滑に仕上げている。体部下端及び底面は手持ちヘラケズリによって調整する。

007号竪穴住居跡（遺構：第19・21図 遺物：第20・22図）

調査区の西側 B4-83グリッド付近に位置する。主軸方位はN-28°-Wを示す。覆土は自然堆積の様相を示す。平面形はやや南北が長い長方形を呈し、約4.7m×5.0mを測る。壁高は30cm～50cmほどで、ゆるやかに立ち上がる。主柱穴は4本検出した。住居廃絶の時、柱を抜き去った形跡は認めない。深さは50cm～60cm



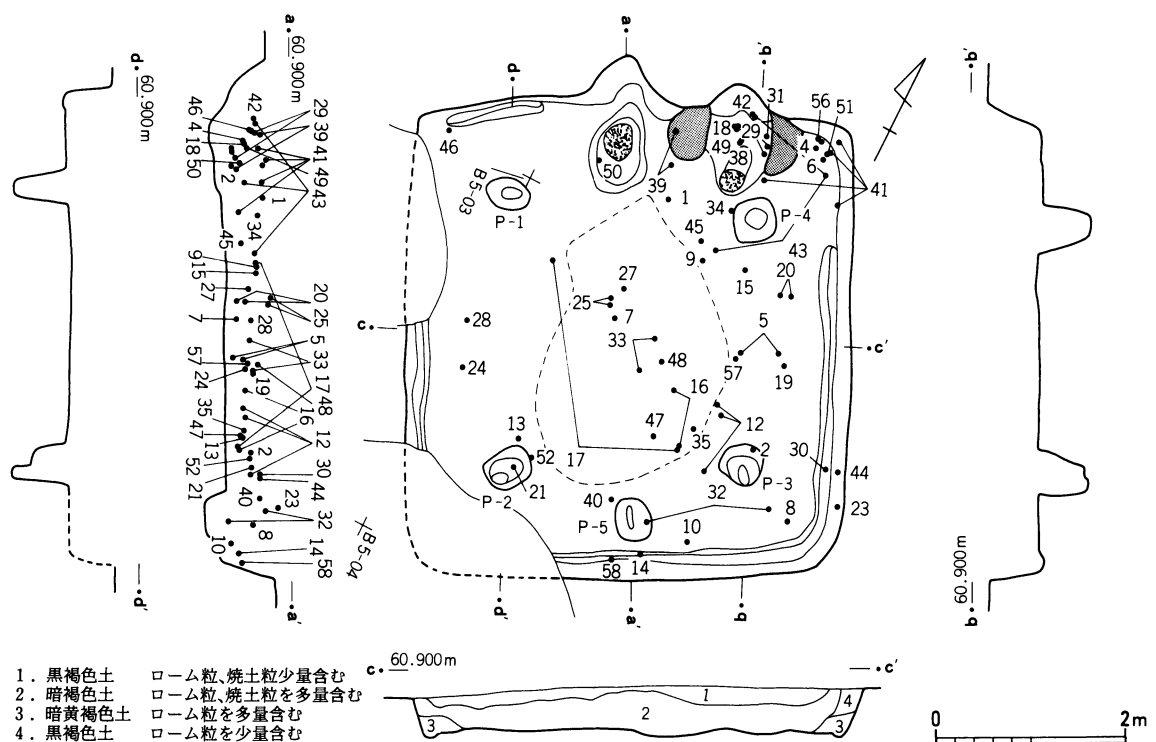
第18図 006号竪穴住居跡平面図及び出土遺物

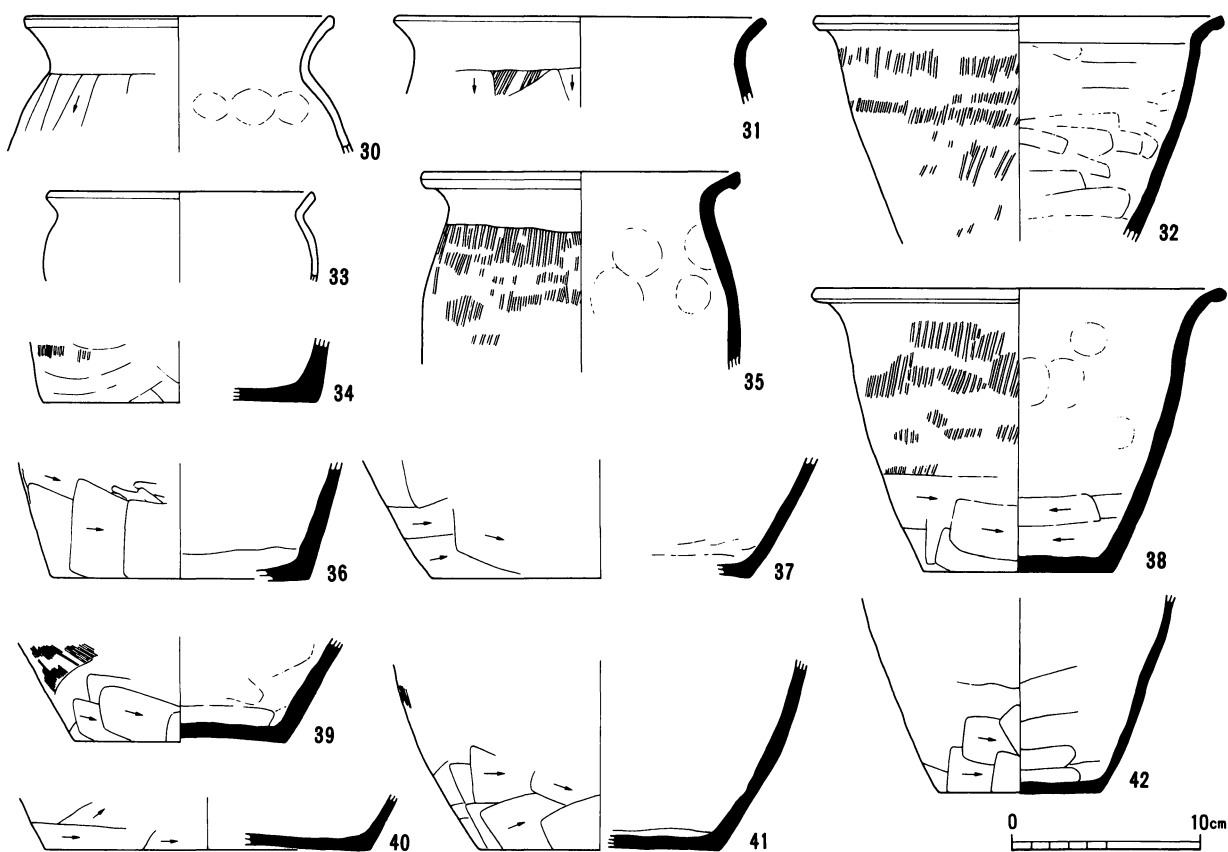
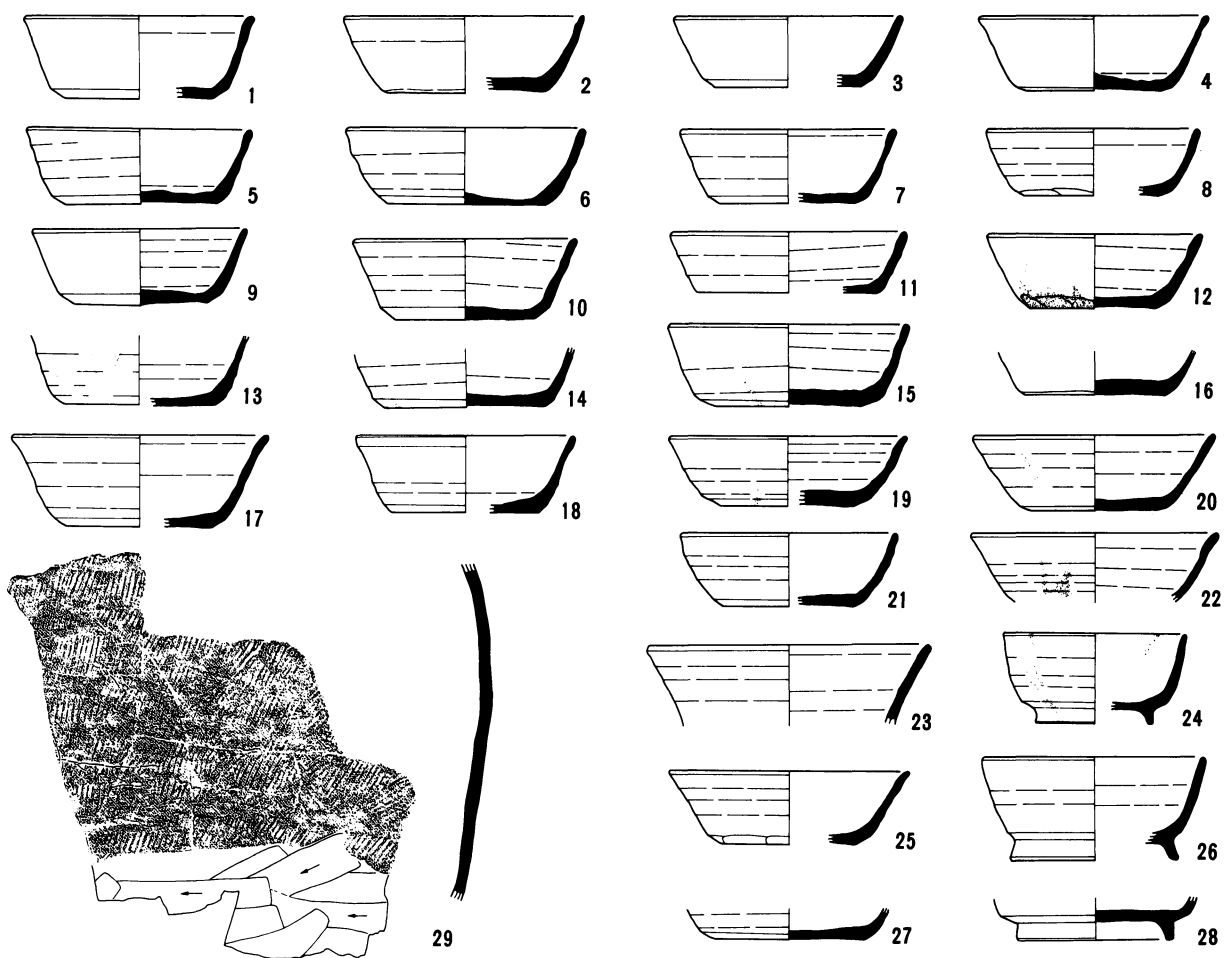
ほどである。南壁中央部付近には入口施設に伴うと考えられるピット(P-5)を検出した。深さは20cmほどである。貼床はほぼ全面に認められる。硬化面は住居中央部付近に広がっている。

カマドは新旧2基を検出した。旧カマドは北壁のほぼ中央部付近に位置する。壁への掘込みは35cmほどで、三角形を呈する。火床部は15cmほど掘り込まれ、中央部付近が赤化している。煙道部へはゆるやかに立ち上がる。新カマドは旧カマドの東隣に位置する。壁への掘込みは30cmほどであり、半円形を呈する。火床部の掘込みは5cm～15cmほどで、凹凸が激しい。また、最前部が赤化している。煙道部へはゆるやかに立ち上がる。構築材の残存状況は良好であり、袖・崩落した天井部を確認した。

遺物は図示したもの以外にも1,360点となり多量に出土した。しかし、床面直上からのものがあまりないことから、カマド内のものを除いては直接に遺構使用時と関係するものは少ないと思われる。図示できた遺物の多さ、破片数の多さを考えても、生活に必要な以上の量である。出土レベルが床面よりもやや高いことから考えても、住居の廃絶後に投棄されたものが大半ではないかと考える。

1～28は須恵器杯である。このうち24・26・28は高台付である。いずれも胎土に砂粒を多く含み、器表面はざらつく。また、焼成時の還元が不十分なものが大半である。特に、6・9・14・17は赤みが強い色調となっている。12・13・14・15・19・22・24には重ね焼きの痕跡である「火だすき」が観察される。体部下端及び底面の調整手法は多くが回転ヘラケズリであるが、2・8・12・16・25は手持ちヘラケズリにより調整する。19～23・25は箱形の器形となる1～18に比べて口縁部の開きが大きい。いずれもロクロ整形の後、器表面にナデを施している。1～4は内外面ともに、6～9・12・15・17・18・21・24・25は外面ないしは内面のロクロ痕を消すまでナデを施す。高台付杯のうち24は26・28に比して、一回りほど小さくなっている。30・33は土師器甕である。いずれも胴部に最大径を持つ。30は口縁部に段を持ち、胴部に縦方向のヘラケズリを施す。内面頸部直下には外面調整の際に、手で押さえていた跡が凹みとして残る。

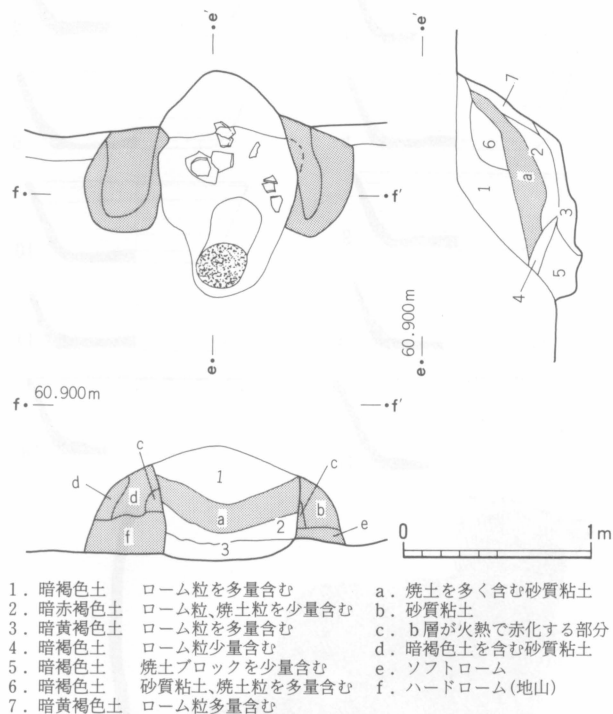




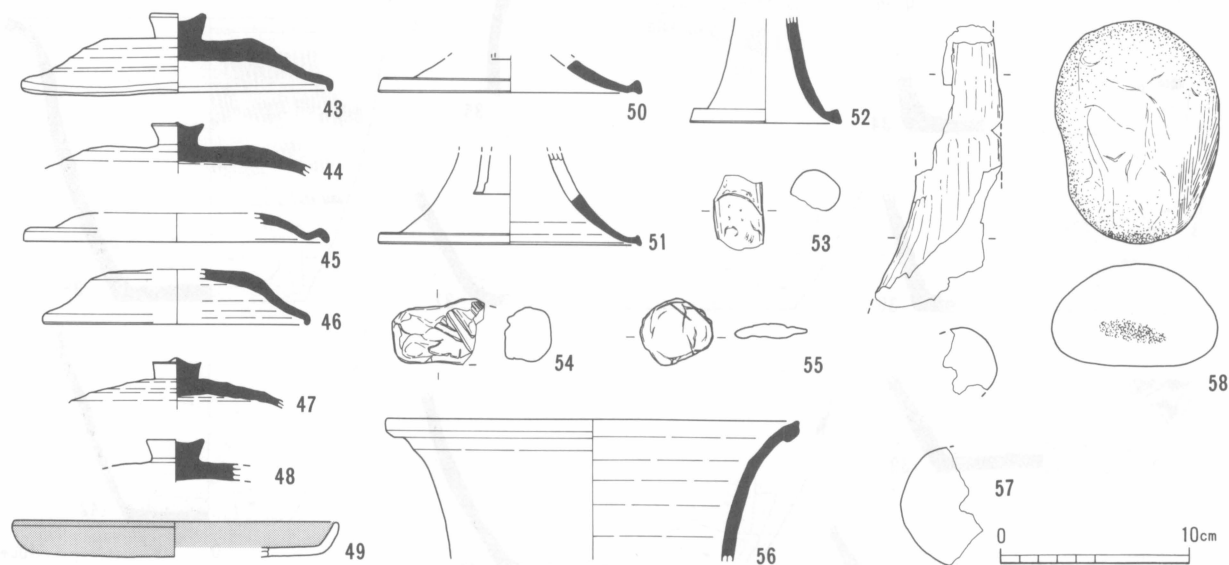
第20图 007号竖穴住居跡出土遺物(1)

33は比較的小型の甕となると考える。口縁部は短く、頸部の屈曲部からあまり外側へ張り出していない。内外面とも丁寧なナデを施し、平滑である。29・31・32・35～42は須恵器甕である。いずれも還元が不十分であり、大半のものがかなり赤みの強い色調をしている。31・35は胴部が張り出す器形であるが、32・38は底部からほぼそのまま上方へ開く器形をなし、最大径を口縁部に持つ。32・35・38は口縁部が大きく外反し、口縁部の内面がほぼ上を向いている。また、ヘラケズリによって口唇部に稜は持つものの、角張らず丸みを帯びるものである。31はタタキによる成形の後、縦方向のヘラケズリを加え、口縁部に横ナデを施す。タタキ技法を除いては、器形的にも土師器の色彩が強い。32・38はタタキ目を磨り消すようにナデを加える。34・36～42胴下部にヘラケズリを施す。

43～48は須恵器杯蓋である。43～46・48は天井部に回転ヘラケズリを施す。43は焼成が非常に悪く、器表面の磨滅・剝落が激しい。成形にもゆがみがある。つまみの上面は凹面形をなす。43・46の端部は一旦水平に開いた後、ほぼ垂直に折れる。49は土師器盤形土器である。内外面に黒色処理を施す。50・51・52は須恵器高杯の脚部である。焼成時の還元はいずれも不十分である。50・51は窓付の脚であることが確認できる。56は焼成時の還元が不十分な須恵器壺である。外面にナデを施しロクロ痕を消す。57は土製支脚である。器表面に整形時のヘラケズリの跡を残す。58は用途不明の石であるが、図右側が研磨により平滑となり、図下面に敲打痕(?)が観察される。53～55は用途不明の土製品で、いずれも手捏ねで製作する。



第21図 007号竪穴住居跡新カマド



第22図 007号竪穴住居跡出土遺物

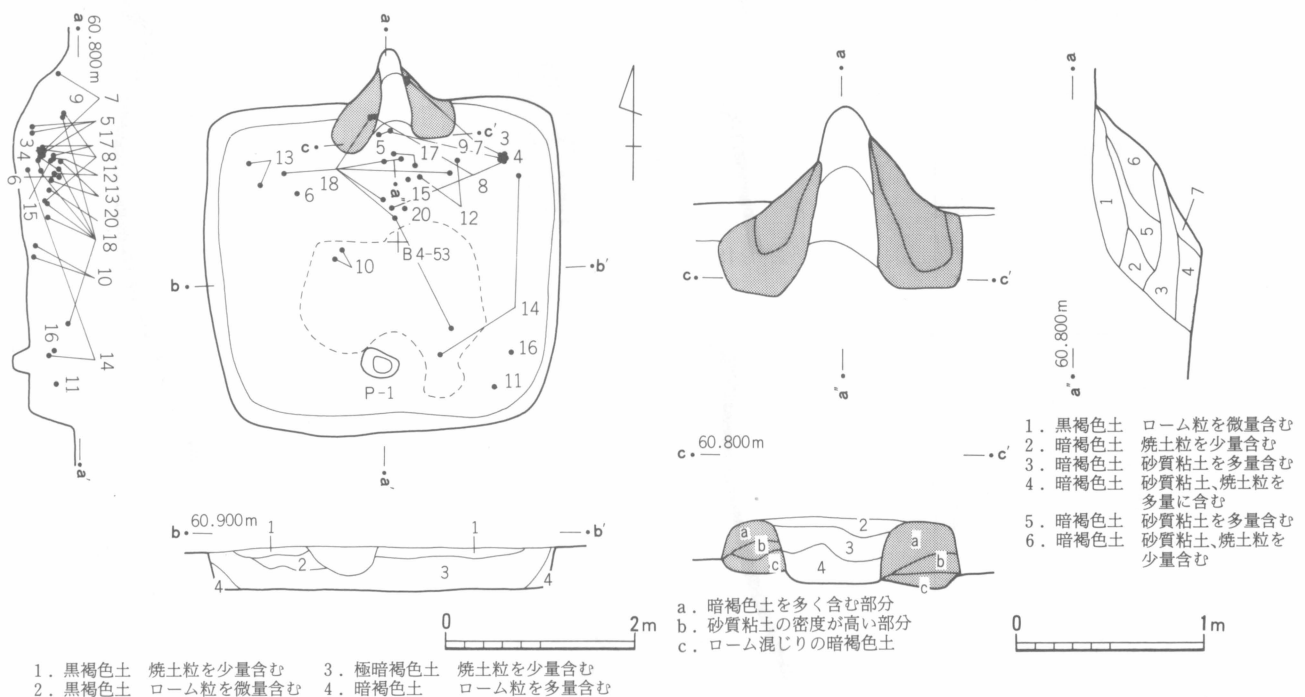
008号竪穴住居跡（遺構：第23図 遺物：第24図）

調査区の西側 B4-53グリッド付近に位置する。主軸方位はほぼ座標北である。平面形は隅丸のやや東西に長い方形を呈し、短軸約3.5m、長軸約3.7mを測る。壁高は40cm～50cmほどで、ほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴らしきものは検出しなかった。P-1は入口施設に伴うピットであると思われる。周溝は検出されず、全体に床も軟弱であったが、硬化面をP-1から中央部付近にかけて認めた。

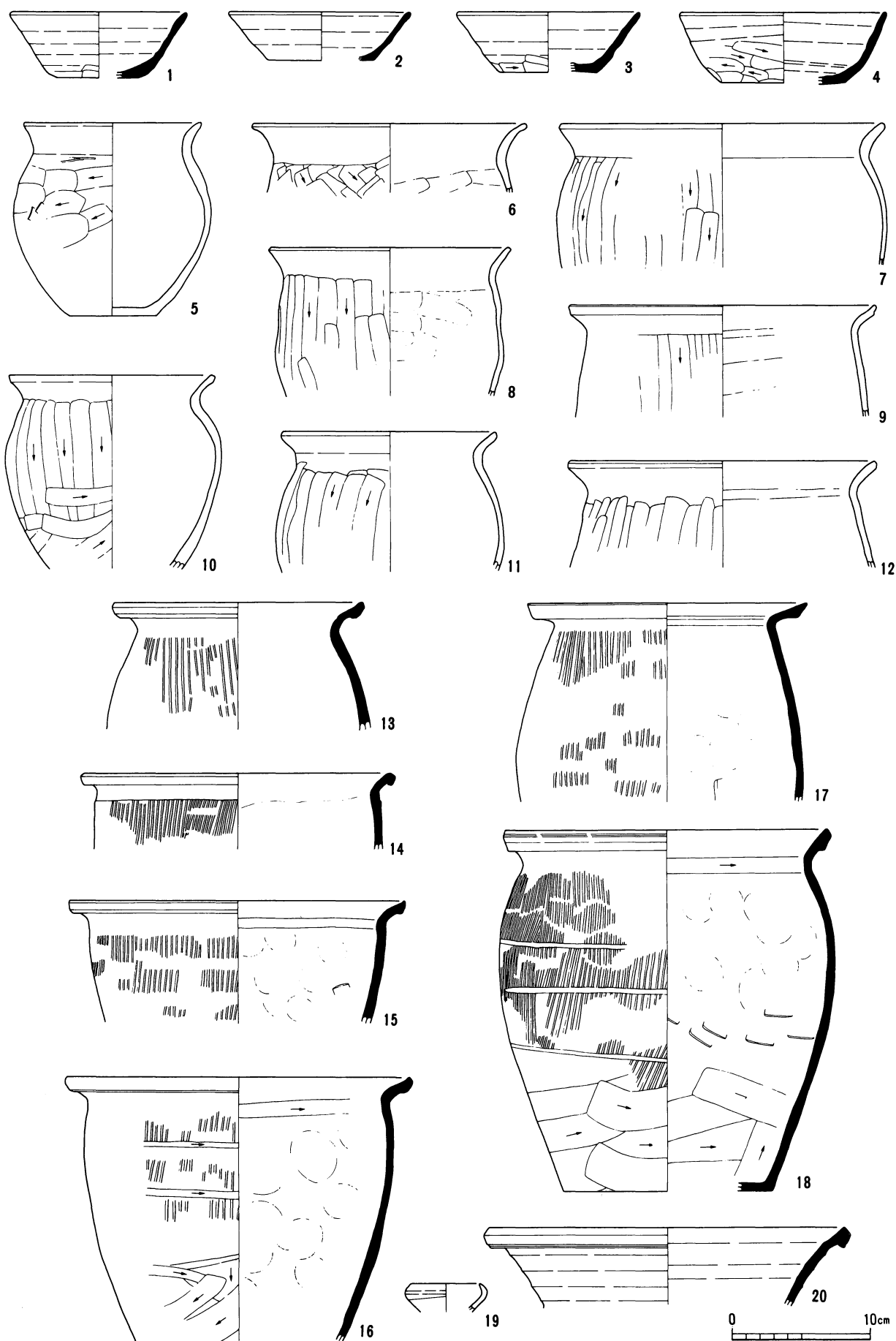
カマドは北壁のほぼ中央部付近に位置する。壁への掘込みは50cmほどであり、半楕円形を呈する。火床部の掘込みは、深さ約15cmである。煙道部へはゆるやかに立ち上がる。両袖は良好に残存していた。

遺物はカマド周辺に集中する傾向を示した。図示できなかった遺物の総数は599点であり、奈良・平安時代の住居では007号竪穴住居跡に次ぐ出土量である。その中には、須恵器甕の底部破片、須恵器杯蓋の破片等も少量ながら含まれている。

1～4は須恵器杯である。いずれもロクロ成形の後、軽くナデを施す。1・3・4は体部下端及び底面調整に手持ちヘラケズリを施す。4は体部がややふくらみ、体下半部までヘラケズリが及ぶ。2は体部下端の調整はなく、底面のみ手持ちヘラケズリを施す。6～12は土師器甕である。このうち5・8・10・11は小型の甕である。7・5・11は胴部の中央部付近、10は胴上部が張り出す。8・9は胴部の張り出しが弱く、寸胴な器形である。7・9・10・12は口縁部の外反が著しい。特に、9は外反の度合いが強く、口縁部の内面がほぼ上方を向く。いずれも外面は口縁部付近に横ナデ、胴部にヘラケズリを施す。13～18は須恵器甕である。底部を欠損しており、甕となる可能性があるがここでは便宜的に甕として取り扱う。13・17は胴部中央付近が張り出す器形になると思われる。18は胴上部が軽く張り出す。15・16は胴部があまり張り出さず、バケツ形の器形を呈する。いずれも口縁部は強く外反するが、特に17はほぼ垂直に外反する。14・18は口縁部を折り返しにより、17は粘土の付け足しにより口唇部が肥厚する。20は須恵器の壺である。頸部以下の形態は不明である。口縁部は折り返しにより肥厚する。19は小型土器である。



第23図 008号竪穴住居跡



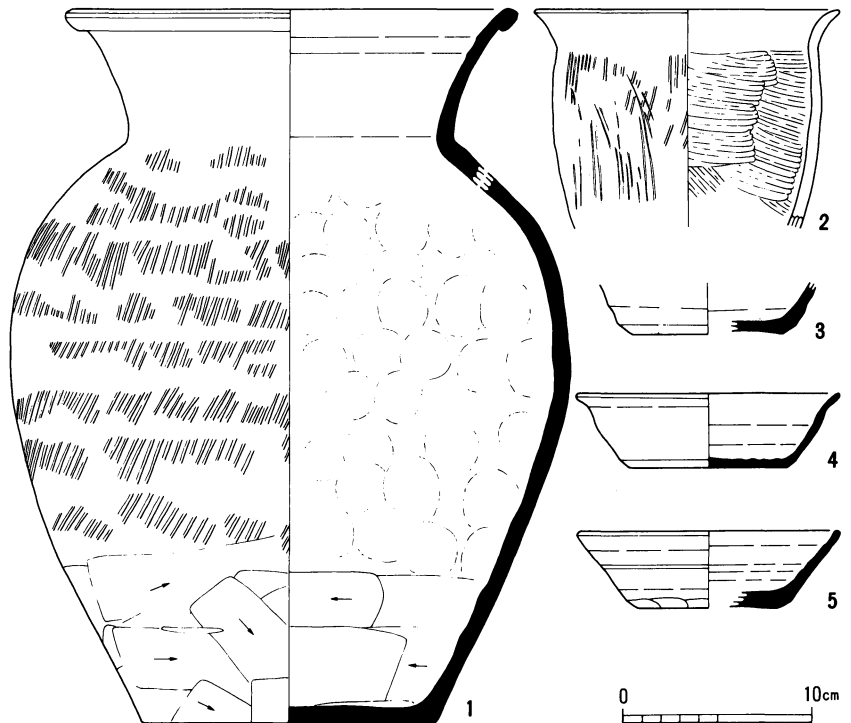
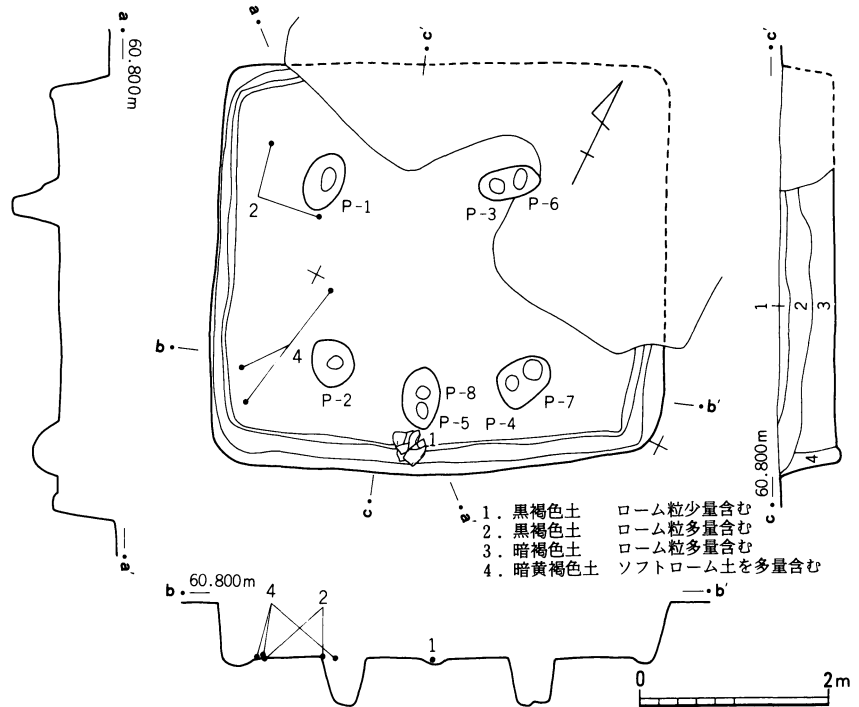
第24图 008号竖穴住居跡出土遺物

009号竪穴住居跡 (第25図)

調査区の西側 B4-03・13グリッド付近に位置する。主軸方位はN-27°-Wを示す。住居跡の北壁から東壁にかけて住居の約1/3が削平されており、カマドは全く検出することができなかった。覆土は自然堆積の状況を示している。平面形は東西に長い方形を呈し、約4.2m×4.7mを示す。壁高は50cm～60cmほどで、ほぼ垂直に立ち上がる。支柱穴は4本検出した(P-1～4)。P-3・4は柱の底面の凹みをそれぞれ2か所検出した。側に移動した結果と考えられる。

深さはそれぞれ、50cmほどである。P-5は入口施設に伴うピットと考えられる。深さは30cmほどである。貼床は全面に認めたが、はっきりと硬化している部分は確認できなかった。

出土遺物のうち図示しなかった破片総数は177点である。その中には須恵器杯蓋、土師器高杯の破片が各2点ずつあった。床面からは少数ながらも大きな破片を検出した。図示した個体は3を除き、床面から出土した。須恵器はいずれも焼成時の還元が不十分なものである。1は須恵器壺である。肩部が接合しなかったものの、全体を推定復元した。頸部以上はロクロ整形し、ナデによりロクロ痕を磨り消す。肩部以下はタタキ、ヘラケズリを施す。2は土師器甕である。甕としては小型のものである。外面は細かいハケ目が残る。内面は先割れ状のヘラを用いたヘラケズリを施す。3～5は須恵器杯である。体部下端及び底面調整は3が回転ヘラケズリ、4・5が手持ちヘラケズリである。4・5は3に比して口縁が開き、やや扁平な器形をなす。

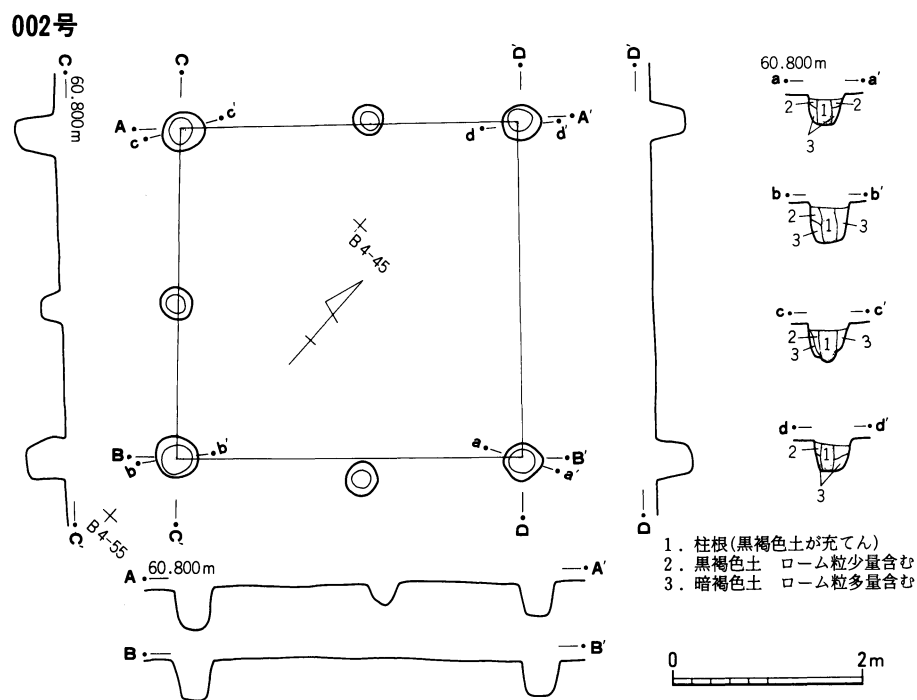
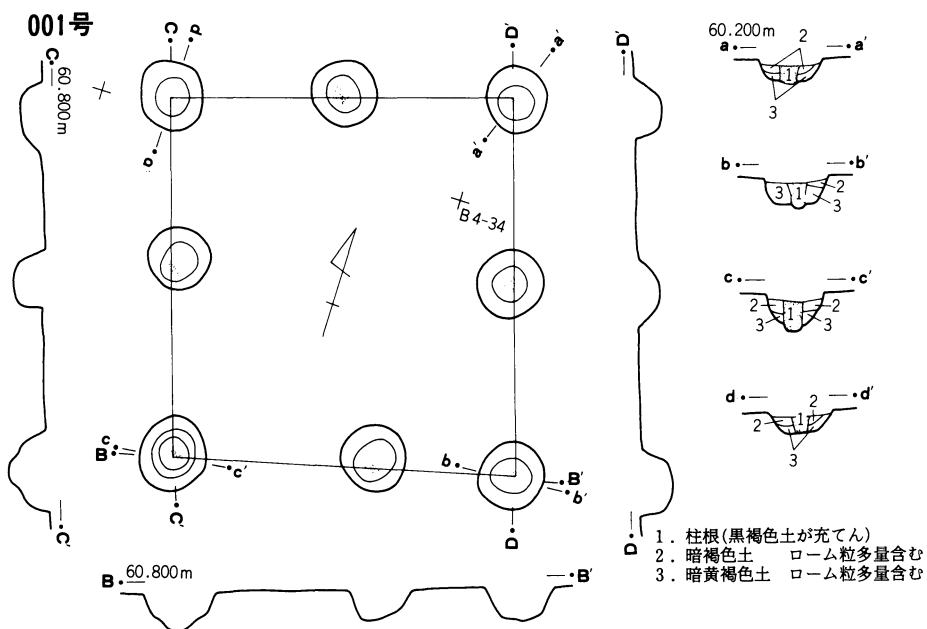


第25図 009号竪穴住居跡及び出土遺物

(2) 掘立柱建物跡 (第26・27図)

001号掘立柱建物跡

調査区の西側 B4-33グリッド付近に位置し、単独である。2間 (3.6m) × 2間 (3.6m) の側柱式掘立柱建物跡である。主軸方位はN-16°-Wを示す。各柱穴の平面形はほぼ円形を呈し、径60cm~70cm、深さ30cm~40cmを測る。柱痕は各柱穴に明瞭に確認することができた。柱間寸法は桁行・梁行ともに1.8m (6尺) である。(1尺は30cmとした。)



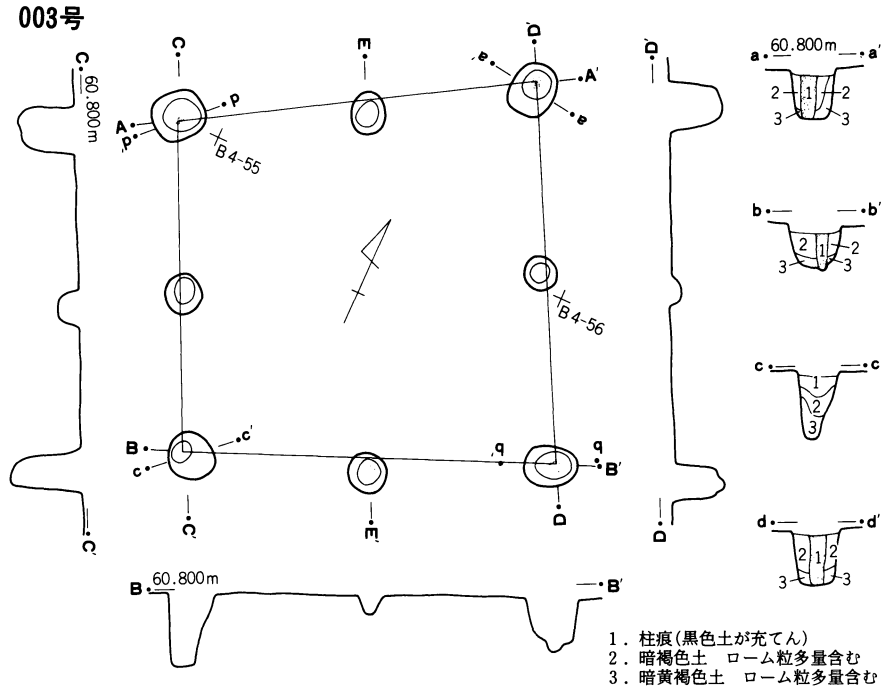
第26図 001号・002号掘立柱建物跡

002号掘立柱建物跡

調査区の西側B4-45グリッド付近に位置し、003号掘立柱建物跡に隣接する。2間(3.6m)×2間(3.6m)の側柱式掘立柱建物跡である。主軸方位はN-48°-Eを示す。各柱穴の平面形はほぼ円形呈し、径34cm~40cm、深さ22cm~40cmを測る。柱痕は各柱穴に明瞭に確認することができた。柱間寸法は桁行、梁行ともに1.8m(6尺)である。

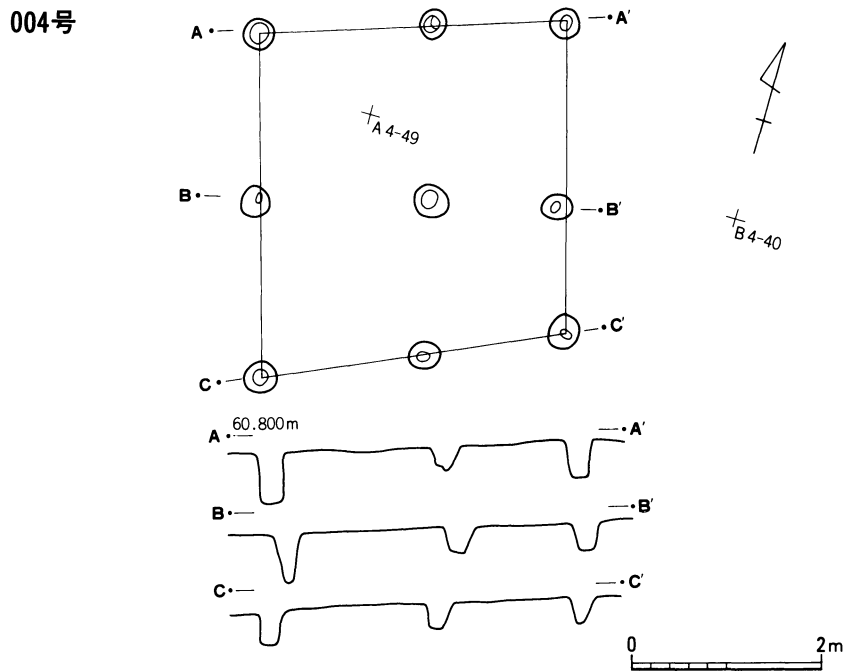
003号掘立柱建物跡

調査区の西側B4-55グリッド付近に位置し、002号掘立柱建物跡に隣接する。2間(3.6m)×2間(3.6m)の側柱式掘立柱建物跡である。主軸方位はN-25°-Wを示す。各柱穴の平面径は円形ないしは楕円形を呈し、径38cm~60cm、深さ12cm~76cmを測る。柱間寸法は桁行・梁行ともに1.8m(6尺)である。



004号掘立柱建物跡

調査区の西側B4-49グリッド付近に位置し、単独である。2間(3.6m)×2間(3.6m)の総柱式掘立柱建物跡である。主軸方位はN-16°-Wを示す。各柱穴の平面形はほぼ円形を呈し、径30cm~35cm、深さ25cm~54cmを測る。柱痕は確認することができなかった。柱間寸法は桁行・梁行ともに1.8m(6尺)であるが、東側の梁行が約1尺ほど短く配置されている。異質な作りであり、掘立柱建物跡とすることに疑問も残る。



第27図 003号・004号掘立柱建物跡

(3) 方形周溝状遺構 (第28・29図)

001号方形周溝状遺構

調査区の中央部南側 C4-98付近に位置する。主軸方向はN-20°-Wを示す。上面の削平のほか溝状の掘込みなど、かなりの攪乱を受けていた。溝は本来、周溝状に掘り込まれていたものと思われるが、北東角及び東側部分については検出することができなかった。東側部分が未検出のため規模は不明であるが、南北方向は周溝外縁で8.0mほどである。周溝の幅は30cm～50cm・深さは10cm～15cmほどである。周溝内部南側部分に長方形の掘込みを検出した。大きさは2.2m×3.1m・深さは10cmほどである。覆土上部には白色粘土・炭化物の堆積を認めた。埋葬施設と考えられるが、削平された上面部分の状況が不明であるため、推測の域を出ない。

002号方形周溝状遺構

調査区の中央部南側 C5-26グリッド付近に位置する。主軸方向はN-10°-Wである。平面形は隅丸でいびつな正方形を呈し、周溝外縁で計測して一辺4.8m～5.8mである。周溝の幅は50cm～70cm・深さは10cm～15cmほどである。周溝内部に埋葬施設らしきものは検出できなかった。

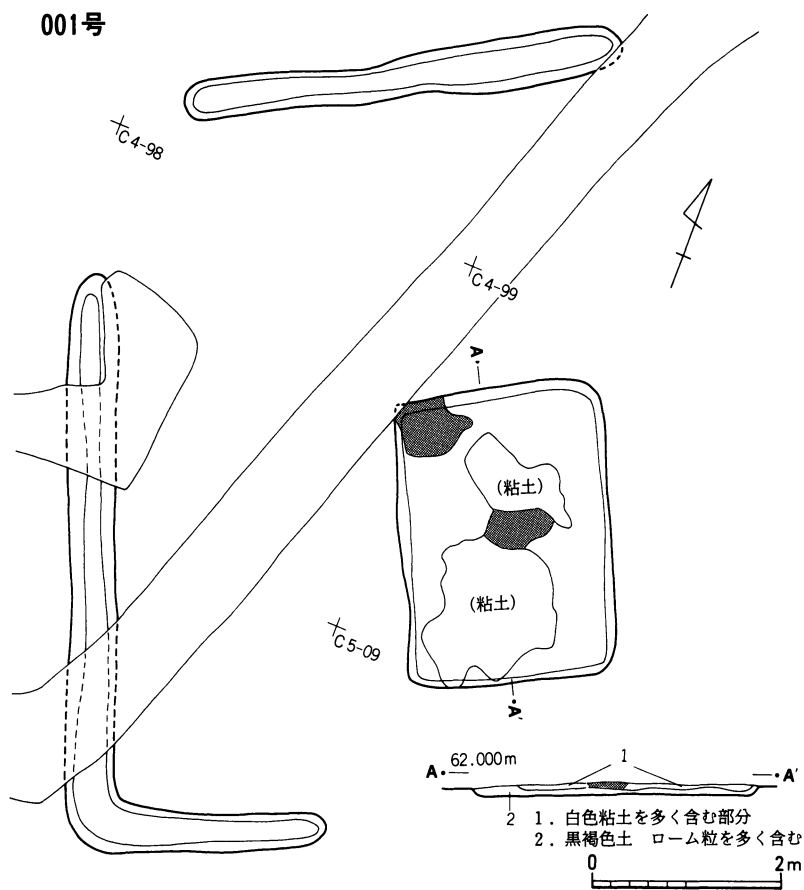
004号方形周溝状遺構

調査区の中央部南側 C5-03・04グリッド付近に位置する。主軸方向はほぼ座標北である。平面形は隅丸の方形を呈し、周溝外縁で計測して南北6.8m、東西7.2mほどである。周溝の幅は55cm～70cm、深さは10cm～15cmほどである。周溝内部に埋葬施設らしきものは検出できなかった。

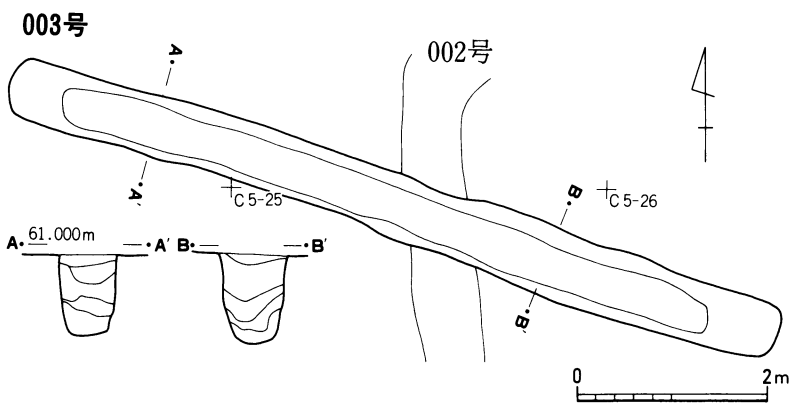
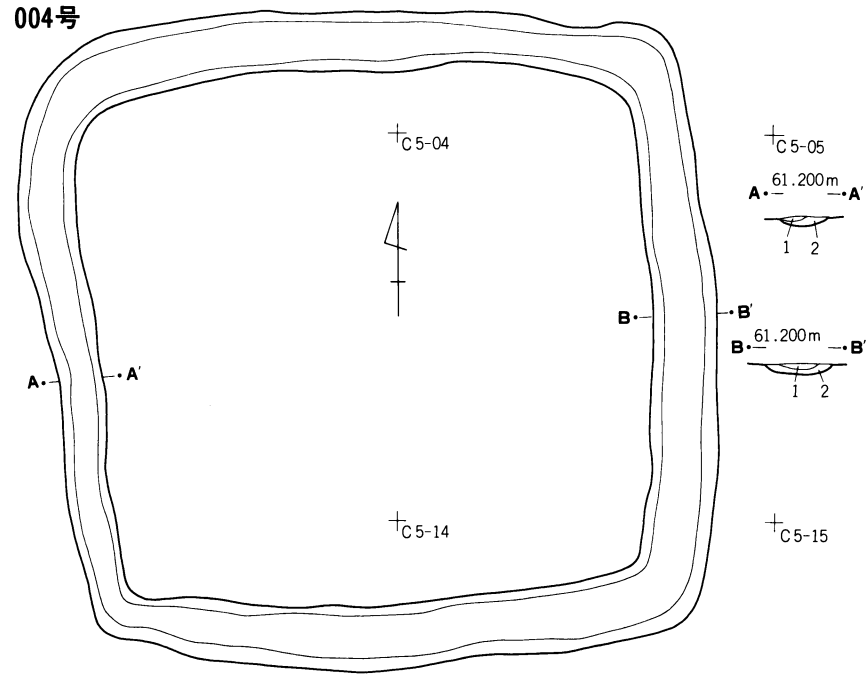
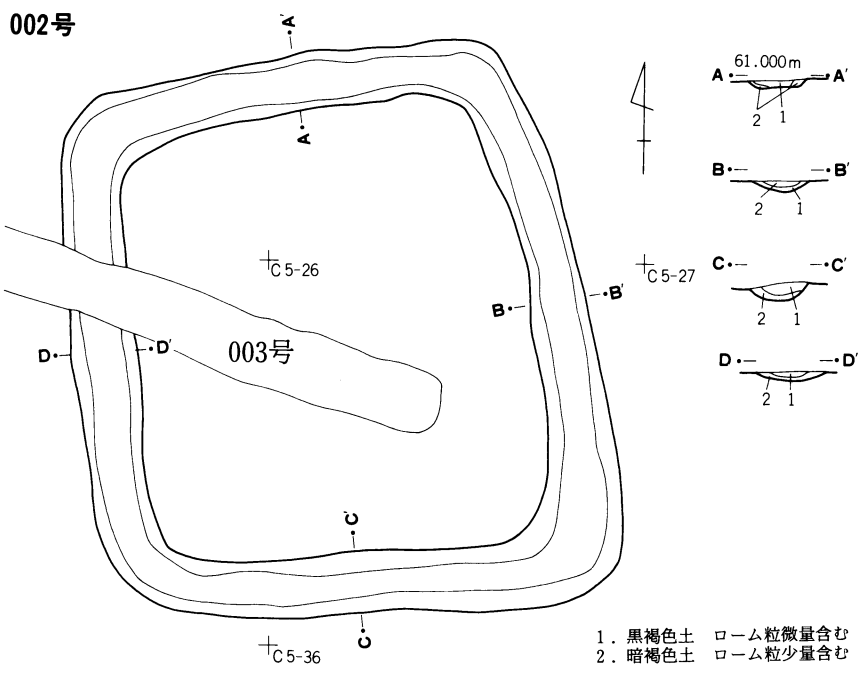
(4) 溝状遺構 (第29図)

003号溝状遺構

調査区の中央部南側 C5-25グリッド付近に位置する。002号方形周溝状遺構の西側部分を切って構築されている。主軸方向はN-85°-Wを示す。長さ8.5m、上面幅60cm～70cm、深さ80cm～90cmほどである。掘込みはしっかりとしており、下底面もほぼ平坦である。両脇の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、溝の両端はゆるやかに立ち上がる形状をなしている。



第28図 001号方形周溝状遺構



第29図 002・004号方形周溝状遺構・003号溝状遺構

III まとめ

1 縄文時代

今回の調査では、陥穴3基と表土中から少量の擦糸文土器・前期土器を検出したにすぎなかった。

(1) 擦糸文土器の出土状況について

擦糸文土器は表土中から散発的に出土した。分布的にはC4グリッドに集中する傾向はあるものの、遺構は確認できなかった¹⁾。今回出土の擦糸文土器は、その型式学的特徴から稲荷台式に比定される。

擦糸文土器は県内多くの遺跡の例を見ても、包含層や遺構が確認できないにもかかわらず、多くの遺跡で少量の出土がみられる。後世の遺跡形成や現代の地形改変行為の結果として、擦糸文期の生活痕跡が破壊されたことも十分に考えられるが、それにしては出土量が少なすぎるのではないだろうか。住居を構築する定住的な遺跡のほかに、住居を持たない非定住的な遺跡も同時に形成していたとは考えられないか。後者はキャンプサイトや季節的集落など様々な性格が想起されるが、どちらにしろ擦糸文期の広範囲にわたる活発な活動の痕跡であると考えられる。西唐沢遺跡周辺では、中野僧御堂遺跡に隣接する皿ヶ谷遺跡から比較的まとまった量の擦糸文土器が採集されている²⁾。付近の遺跡からも採集例はあるが、現在のところ量的にまとまっているのは皿ヶ谷遺跡だけである。

近年は擦糸文土器段階の比較的大きな集落跡も調査され、徐々にその文化内容が明らかになりつつある。下総台地では三里塚周辺を中心に集落跡が確認されている。利根川流域には貝塚も形成しており、ある程度の定住化が進んできていることが予想される。しかし、先に述べたように擦糸文土器は遺構や明瞭な遺物包含層を形成せず、少量の土器片のみを出土する例が依然として多い。皿ヶ谷遺跡を中心とする鹿島川水系上流域の綿密な踏査をおこない、擦糸文土器の分布状況を明確にすれば、西唐沢遺跡における擦糸文土器の出土状況のよりよい解釈が可能となるだろう³⁾。

(2) 陥穴について

いずれも開口部・底面とも楕円形を呈し、深さは2mを越えるものである。002号・034号の断面形態は底面に近づくにしがたい狭くなるが、底面自体はフラットであり楕円形を保っている。021号の長軸方向の断面は底面近くでやや広がるが、覆土を見る限りでは壁面が崩落した結果と考えられ、002号・034号とほぼ同様の形態をなすと考えられる。

分布は3基のみの確認なので、今回の調査区の中では極めて散発的であると言える。ただ、一つの傾向性として台地上でも谷に近い部分に配置されている。けものみちなどを意識して設置されたものであろうか。

3基が同時存在であるかどうかは、明確な伴出遺物がないこと、規則的な配列を見いだせないことから明言はできない。しかし、規模・形態が類似することから近接する時期に設置されたものと思われる。

2 古墳時代

古墳時代に属する遺構としては竪穴住居跡5軒・方墳1基を検出した。

(1) 竪穴住居跡の年代について

遺物は002号住居跡にまとまって出土したほかは散発的なものであった。いずれも出土状態を見る限り、住居の廃絶後に投棄されたものが多い。したがって、遺構使用時の状況や年代を明確に示すものとは言い難い。しかし、出土土器と住居の大きさを見ると明らかに2つに分類が可能であり、若干の時期差が見受けられる。

まず、住居面積の大きい002号住居跡出土土器を見ると、土師器杯は口径が14～15cmの中型品である。7世紀後半に見られるような小型化の傾向はまだ見られない。また、黒色処理のみで赤彩されたものもない。土師器甕は長胴化の傾向があるものの、胴部に膨らみを残すものである。したがって、年代は7世紀前半と考える。004号住居については遺物は少量で小型甕のみが復元可能であったことから、はっきりとした年代は不明である。しかし、ここでは住居面積が002号に近いことから、時期についても002号に近い位置と考える。

一方、住居面積の小さい003号・005号・010号住居出土の様相は異なる。003号・005号住居の土師器甕は長胴化し、010号住居の杯は小型化したものもある。よって、これらの住居は遺物の点から7世紀後半と考える。住居面積から考えても、この時期は小型化する傾向にあり、矛盾はしないと考える。

(2) 方墳について

001号方墳は一部ハードルーム面まで削平されており、墳丘や主体部の有無は不明である。遺物も古墳時代、奈良・平安時代双方のものが認められるとともに、周溝覆土上部からの出土であり、方墳の年代を特定する材料にはなり得なかった。「方墳」とした理由は、後に述べる「方形周溝状遺構」とは明らかに規模、形態が異なり、少なくとも同時期のものではないと判断したことによる。よって、本報告では古墳時代末期、7世紀後半に出現する小型方墳に属するものとして扱った。

3 奈良・平安時代

奈良・平安時代に属する遺構としては竪穴住居跡5軒・掘立柱建物跡4棟・方形周溝状遺構3基を検出した。

(1) 出土土器について

遺物の出土量は007号・008号住居に集中しており、この2つを基準として考えたい。須恵器杯に注目すると、007号住居の須恵器杯の方が008号住居に比し、口径と底径の比が小さいものが多い。須恵器甕の口唇部を見ても008号住居は上方につまみ上げているものが多い。他遺跡の須恵器の変遷を見てもわかるとおり、この差は、わずかではあるが時期差であると考えることができる。搬入品や比較的年代のはっきりとする中原窯産の須恵器が多く出土した東金市妙経遺跡出土土器の編年⁴⁾を見ると、007号住居が8世紀後半(妙経遺跡VI期)、008号住居が8世紀末葉～9世紀初頭(妙経遺跡VII期)と考えられる。同様に、006号住居は前者に、001号・009号住居は後者に位置付けることができる。しかし、本遺跡は妙経遺跡出土須恵器よりも全体的に質が劣るなどかなりの違いが指摘でき、年代観については今後さらに検討するが必要あると考える。

本遺跡の奈良・平安時代須恵器に関しては焼成時の還元が不十分なものが大半を占めている。これらは在地窯で製作されたものと考えられるが、いわゆる「ロクロ土師器」ほど色調が赤味を帯びるものではない。本遺跡の周辺で様相が明らかとなっている在地窯には千葉市中原窯、宇津志野窯、南河原坂窯などがあるが、本遺跡出土の須恵器より時期的に後続するものであり、対応はしない。しかし、本遺跡に対応する須恵器は近くの東金市山田水呑遺跡などで出土しており、今後この時期の在地窯がどこにあり、どう流通しているのかを探ることが一つの課題になると思われる。

(2) 集落について

先に述べたように、奈良・平安時代住居跡は大きく連続する2時期に分かれる。8世紀後半に2軒、8世紀末葉～9世紀初頭に3軒が存在している。調査対象範囲外、特に西側にまだ集落がのびる可能性はあるが、重複が見られず、調査区内に空白域が多いことから2軒から3軒を1組にして集落の変遷がなされたと考える。また、これにほぼ同数の掘立柱建物跡や方形周溝状遺構が伴っていたと思われる。掘立柱建物跡に関しては大きさが2間×2間であり、竪穴住居跡の大きさとほぼ同じである。また、位置的にも竪穴住居跡に近接して設置されている。柱穴も掘込みは浅く、束柱もなく頑丈な作りとは思えない。したがって、本遺跡の掘立柱建物跡は住居ではなく、山田水呑遺跡の分析⁵⁾にあるような作業場や納屋などとするのが適当であると考えられる。

以上のことから、近接する山田水呑遺跡が比較的大きな開拓村として成立するところに、小さな山間の村として展開していた本遺跡の姿が推測される。

注1 第8図14は003号陥穴から出土したが、その出土状況から遺構に伴うものとはいいがたく、グリッド出土の遺物として扱った。

2 中村恵次・斎木 勝 1976 『中野僧御堂遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
皿ヶ谷遺跡は千葉東金道路建設中に発見され、表面採集が行われた。

3 綿密な分布調査による遺跡理解の有用性は次の文献によって詳しく述べられている。

園生貝塚研究会 1995 『縄文人の海と貝塚―東ノ上(西)貝塚発掘調査抄録』 筑波書房

4 糸川道行 1994 『妙経遺跡・井戸谷9号墳』 財団法人千葉県文化財センター

5 石田広美 1977 「V掘立柱建物址の分析」『山田水呑遺跡』 山田遺跡調査会

第1表 古墳時代土器觀察表

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成
002号住居	1	土師器杯	80	13.3	4.5		やや密	良
	2	土師器杯	50	15.5	4.4		やや密	やや良
	3	土師器杯	60	13.7	4.3		やや粗	やや悪
	4	土師器杯		13.1	4.8		やや粗	やや悪
	5	土師器杯	70	12.7	3.5		やや密	やや悪
	6	土師器杯	50	13.4	3.4		やや密	やや良
	7	土師器杯		13.9	2.8		やや密	やや良
	8	土師器杯	75	13.6	5.4	5.8	やや密	やや良
	9	須恵器杯蓋	70	11.8	4.3	5	密	やや良
	10	土師器壺	80		9.8	5	やや密	やや良
	11	土師器甕	60		8.3	5.4	やや密	やや悪
	12	土師器杯	20	9.9	4.4		やや密	やや良
	13	須恵器杯蓋	95	12.2	4.6		密	良
	14	土師器甕	5	17.8	6.4		やや密	やや良
	15	土師器甕	15		8.9	6	やや粗	やや悪
	16	土師器高杯			5.1		やや密	やや良
	17	土製支脚						
	18	土製支脚						
	19	土製支脚						
	20	土師器甕	5	20.1	18.5		やや密	やや良
	21	土師器甕	60	26.4	25.1	7.8	粗	悪
	22	土製品	100				密	やや良
	23	土製品	100				やや密	やや良
	24	土製品	100				やや密	やや良
	25	石製品	30					
	26	手捏土器	80	4.8	4.9	2.1	密	やや良
	27	土師器甕	90	18.3	33.5	9.6	やや密	やや悪
	28	土師器甕	80	15.4	27.1	7.2	密	やや良
	29	土師器甕	85	16.8	22.1	6.6	密	やや良
003号住居	1	土師器甕	60	20	27.3		密	やや良
	2	土師器甕	85	13.6	20.7	5.6	やや密	やや良
004号住居	1	土師器甕	65	11	8.3		密	やや良
	2	土師器甕	5	15.4	8.2		やや粗	やや良
	3	土師器甕	50	12	13.2	6.2	やや密	良
	4	土師器甕	10	15.4	14.6	5.8	やや密	やや悪
	5	土製支脚						
	6	土師器甕			13.2	9.8	やや密	良
	7	土師器甕			3.1	5	密	良
	8	手捏土器			1.7	1.8	やや粗	やや悪
005号住居	1	土師器杯	25	12.7	3.8	8.2	やや密	良
	2	須恵器杯	30	10.2	1.8	7.7	やや粗	やや悪
	3	土師器杯	30	14	7.2		やや密	良
	4	土師器甕	40	20	31	5.3	やや粗	やや悪
010号住居	1	土師器甕	20	25.3	31	10	やや密	やや悪
	2	土師器高杯			4		やや密	良
	3	土師器杯	90	5.4	3.8		密	良
	4	土師器杯	85	12	4.7		やや粗	良
	5	土師器高杯		12	3.4		密	やや良
001号方墳	1	土師器甕		14.6	24		やや密	やや良
	2	土師器高杯	10	19.6	5.5		やや密	やや悪
	3	須恵器壺	60	10	14.6	9.6	密	良
	4	土師器壺		4.2	4.3		やや密	やや良
	5	土師器甕	5		3	8	密	良
	6	須恵器杯	30	10.4	3.3		密	良
	7	須恵器杯	40	11.4	3.8	7	やや粗	やや悪

第2表(1) 奈良・平安時代土器観察表

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成	
001号住居	1	須恵器杯	50	13.8	5.2	6.9	やや粗	やや良	
002号住居	1	土師器甕	20	11.8	8.5		やや粗	やや良	
	2	須恵器杯	35	12.4	3.6	6.6	密	良	
	3	須恵器杯	40	12.9	3.5	6.7	やや密	やや良	
	4	須恵器高杯		21.5	7.4		密	やや悪	
	5	須恵器杯	60	12.6	3.8	8	やや密	やや良	
	6	須恵器高杯			2.9	7.8	密	良	
	7	手捏土器	30	5.1	1.5	3.6	密	良	
	8	土師器甕	50	20.7	23.3		やや密	やや良	
	9	土師器甕	5		3.8	6	やや粗	やや良	
	10	土師器甕	5		3	8	やや密	やや良	
	11	須恵器甕	10	28	9.3		密	良	
	12	須恵器甕	10	25	9.1		密	良	
	13	土師器甕	5		8.3	13.6	やや密	やや良	
	14	土製支脚	95						
007号住居	1	須恵器杯	50	12.2	4.4	7.8	やや密	やや良	
	2	須恵器杯	20	12.7	4.1	8	やや密	やや良	
	3	須恵器杯	15	12.2	3.8	7.8	密	良	
	4	須恵器杯	80	12.2	4	7	やや密	良	
	5	須恵器杯	70	12	4	8	やや粗	やや悪	
	6	須恵器杯	80	12.7	4.1	8.4	やや粗	やや悪	
	7	須恵器杯	30	11.4	3.9	7.2	やや密	やや良	
	8	須恵器杯	25	11.3	3.6	7.1	やや密	やや良	
	9	須恵器杯	60	11.4	4.1	7	やや粗	やや良	
	10	須恵器杯	55	11.8	4.3	7.4	やや密	やや良	
	11	須恵器杯	20	12.5	3.3	9.6	やや密	やや良	
	12	須恵器杯	70	11.4	3.9	6.6	やや密	やや良	
	13	須恵器杯	40		3.7	8.5	やや密	やや良	
	14	須恵器杯			2.1	8.5	密	良	
	15	須恵器杯	50	12.7	4.3	7.6	やや粗	やや良	
	16	須恵器杯			2.3	7.5	やや密	やや良	
	17	須恵器杯	25	13.7	4.8	7.8	やや密	やや良	
	18	須恵器杯	20	11.6	4	7.8	密	良	
	19	須恵器杯	20	12.6	3.7	7	密	良	
	20	須恵器杯	30	12.8	3.9	6.7	やや密	やや良	
	21	須恵器杯	35	11.6	3.8	6.8	やや密	やや良	
	22	須恵器杯	20	13	3.6		密	良	
	23	須恵器杯	20	5	4.2		やや密	やや良	
	24	須恵器高杯	30	9.7	4.7	6.3	やや密	良	
	25	須恵器杯	15	12.8	3.8	7	やや密	やや良	
	26	須恵器高杯	20	11.8	5.3	8.9	やや密	やや良	
	27	須恵器杯	40		1.6	7.8	やや粗	やや良	
	28	須恵器高杯	15		2.2	8.3	やや粗	良	
	29	須恵器甕				17.5	やや粗	やや悪	
	30	土師器甕			16.3	7	やや密	やや良	
	31	土師器甕			19.7	4.5	やや密	やや良	
	32	須恵器甕	15	21.6	11.7		やや粗	やや悪	
	33	土師器甕			14.1	4.7	やや密	やや良	
	34	須恵器甕				3.2	14.4	密	良
	35	須恵器甕	5	16.8	10.3		やや粗	やや悪	
	36	須恵器甕			6.1	13.5	やや密	やや良	
	37	須恵器甕			6.2	16.8	やや密	やや良	
	38	須恵器甕	50	22.9	14.6	10	やや密	やや良	
	39	須恵器甕			5.4	11.2	やや密	やや良	
	40	須恵器甕			2.8	17.1	密	良	
	41	須恵器甕			9.8	12.6	やや密	やや良	
	42	須恵器甕				10.1	8.5	やや密	やや良
	43	須恵器杯蓋	90	16.4	4.3		やや密	悪	

第2表(2) 奈良・平安時代土器観察表

遺構番号	挿図番号	器種	遺存度(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	焼成
007号住居	44	須恵器杯蓋	25		2.6		密	良
	45	須恵器杯蓋	10	16	1.5		密	良
	46	須恵器杯蓋	30	13.8	2.8		密	良
	47	須恵器杯蓋	50		2.7		やや密	やや良
	48	須恵器杯蓋	10		2.1		密	良
	49	土師器盤状	10	17.3	1.8	15.5	やや密	良
	50	須恵器高杯	3		2	14	密	良
	51	須恵器高杯	5		5	14	密	やや良
	52	須恵器高杯	5		5.5	8	密	良
	53	手捏土器			2.1		やや粗	やや悪
	54	手捏土器			2.9		やや粗	やや悪
	55	手捏土器			0.8		やや粗	やや悪
	56	須恵器甕		22	7.2		やや密	やや良
	008号住居	1	土師器杯	20	12.8	4.8	5.9	やや密
2		須恵器杯	20	13.2	3.5		やや密	良
3		須恵器杯	20	13.4	4.4	7.1	やや粗	やや悪
4		須恵器杯	25	115	5.1	9	密	やや悪
5		土師器甕		12.8	14	6.2	やや密	やや良
6		土師器甕		20	5		やや密	良
7		土師器甕	10	23.7	10.5		やや密	やや良
8		土師器甕		17.7	10.5		やや密	良
9		土師器甕		22.2	7.9		やや密	良
10		土師器甕	80	14.8	13.7		やや密	良
11		土師器甕		15.8	9.9		やや粗	良
12		土師器甕		22.4	7.5		やや粗	良
13		須恵器甕	5	18	9		やや粗	やや良
14		須恵器甕	5	22.8	5.4		密	良
15		須恵器甕	5	24.2	8.7		密	やや良
16		須恵器甕	8	24.8	18.7		やや密	良
17		須恵器甕	30	20.4	14		やや密	良
18		須恵器甕	40	23.3	25.6	15.2	密	やや良
19		手捏土器	30	5	2		密	良
20		須恵器壺		25.7	5.5		密	良
009号住居	1	須恵器壺	45	23.9	37	15.6	密	良
	2	土師器甕		16.1	11.3		密	良
	3	須恵器杯			2.7	8	やや密	良
	4	須恵器杯	75	14.1	3.8	8.4	やや粗	やや良
	5	須恵器杯	25	13.8	4	7.3	密	良

第3表(1) 出土土器破片数一覧(古墳時代堅穴住居)上段点数、下段重量(g)

遺構番号 器種	002号 住居	003号 住居	004号 住居	005号 住居	010号 住居
須 恵 器	杯 2 50	4 40	1 2	10 70	0 0
	甕 0 0	1 2	0 0	6 60	0 0
	蓋 1 3	0 0	0 0	0 0	0 0
	合計点数 3	5	1	16	0
	合計重量 53	42	2	130	0
	重量比(%) 0.7	8.7	0.1	57.8	0
土 師 器	杯 84 520	2 20	15 100	3 40	19 110
	甕 648 6572	48 420	181 1400	11 50	100 1140
	甌 1 40	0 0	0 0	1 5	1 40
	高杯 4 110	0 0	0 0	0 0	0 0
	小型土器 0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
	壺 0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
	支脚 8 110	0 0	9 200	0 0	1 3
	蓋 0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
	合計点数 745	50	205	15	121
	合計重量 7532	440	1700	95	1293
	重量比(%) 99.3	91.3	99.9	42.2	100

※「重量比」は各堅穴住居跡の中での割合。

第3表(2) 出土土器破片数一覧(奈良・平安時代堅穴住居)

遺構番号 器種	001号 住居	006号 住居	007号 住居	008号 住居	009号 住居
須 恵 器	杯 7 80	123 900	467 2490	63 2600	61 630
	甕 6 80	86 1550	483 8140	96 320	39 760
	蓋 0 0	7 55	61 420	5 30	1 2
	合計点数 13	216	1013	164	101
	合計重量 160	2505	11360	2950	1392
	重量比(%) 57.6	53.4	92.6	47.5	62.6
土 師 器	杯 0 0	0 0	63 190	31 210	24 120
	甕 15 110	310 2140	264 720	400 3050	51 700
	甌 0 0	9 45	0 0	0 0	0 0
	高杯 0 0	0 0	0 0	0 0	2 10
	小型土器 0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
	蓋 0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
	支脚 0 0	0 0	0 0	0 0	0 0
	蓋 1 8	1 3	1 2	2 5	1 2
	合計点数 16	320	327	431	77
	合計重量 118	2188	910	3260	830
	重量比(%) 42.4	46.6	7.4	52.5	37.4

○ 中野僧御堂遺跡

○ 西唐沢遺跡

鹿島川



調査区全景(1) (北西上空より)



調査区全景(2) (南西上空より)

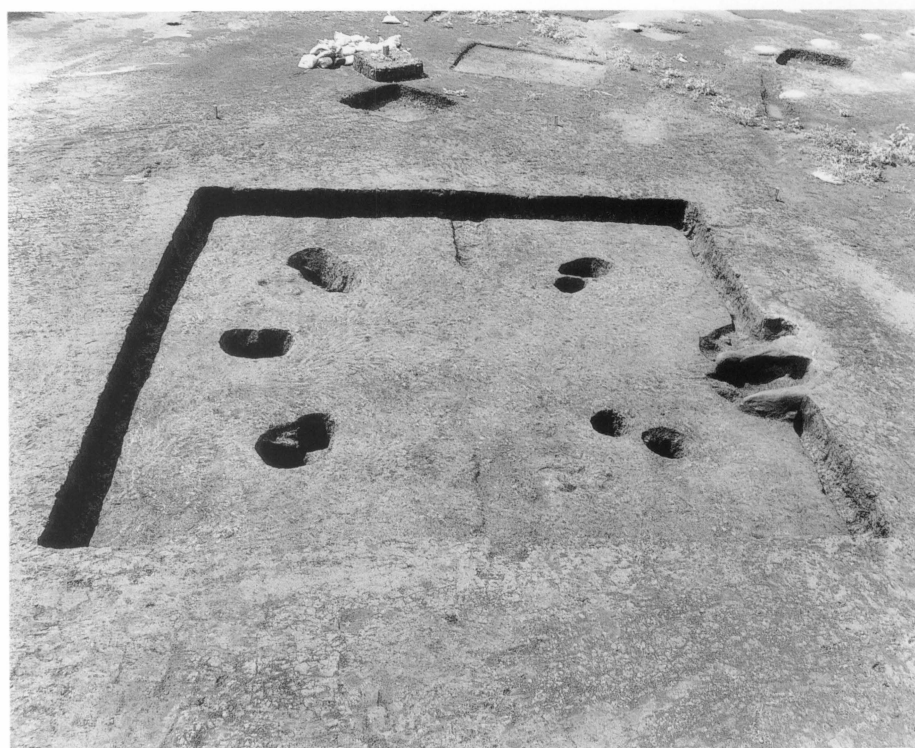


遺跡近景 (北西より)





003号竖穴住居跡全景



002号竖穴住居跡全景



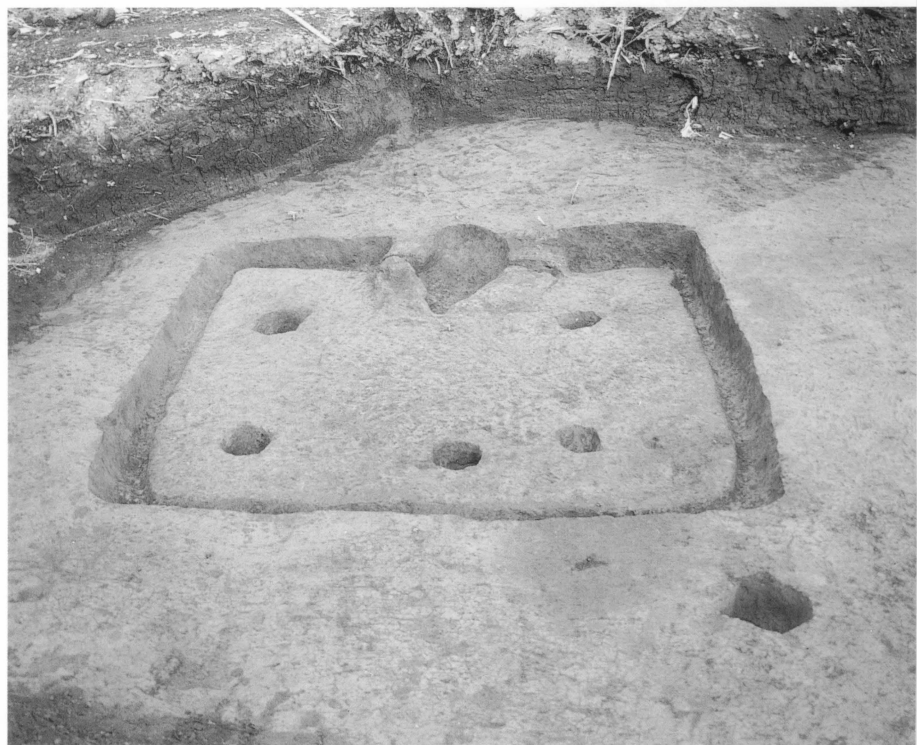
004号竖穴住居跡全景



010号竖穴住居跡全景



鉄鎌出土状況



001号竖穴住居跡全景



005号竖穴住居跡全景



006号竖穴住居跡全景



007号竖穴住居跡全景



008号竖穴住居跡全景



009号竖穴住居跡全景



009号竖穴住居跡掘方



001号掘立柱建物跡全景

002号掘立柱建物跡全景



003号掘立柱建物跡全景



004号掘立柱建物跡全景





001号方墳全景（南西上空より）



001号方墳全景



001号方墳周溝部分近景



主体部検出状況



001号方形周溝状遺構全景



002・003号方形周溝状遺構全景



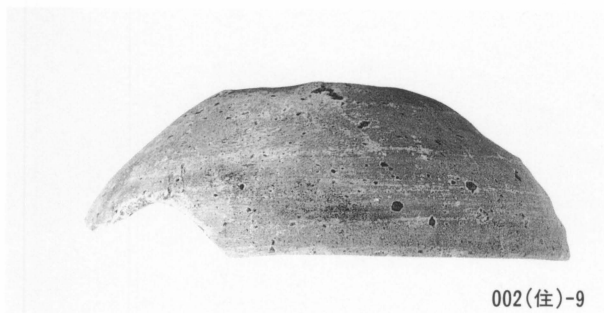
004号方形周溝状遺構全景



002号陥穴全景



調査風景



002(住)-9



002(住)-1



002(住)-13



002(住)-2



002(住)-16



002(住)-3



002(住)-26



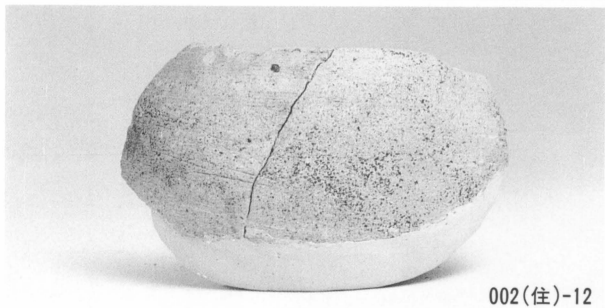
002(住)-5



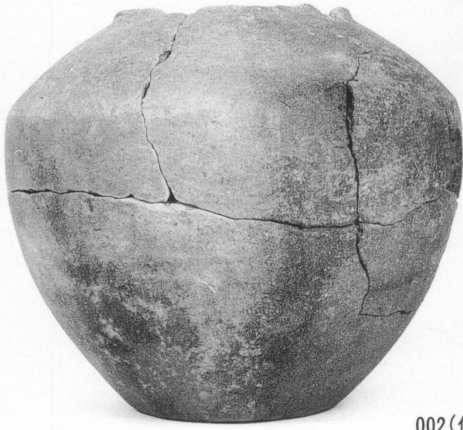
002(住)-21



002(住)-8



002(住)-12



002(住)-10



002(住)-11



002(住)-29



002(住)-15



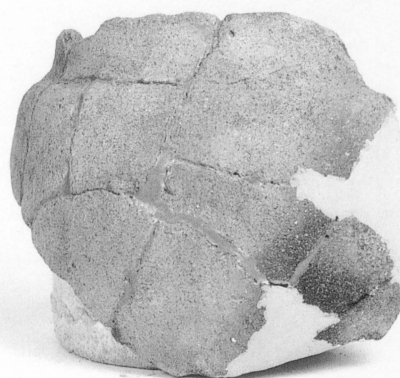
002(住)-27



002(住)-28



003(住)-1



004(住)-3



004(住)-7



003(住)-2



004(住)-8



004(住)-3



005(住)-1



004(住)-1



005(住)-3



005(住)-4



001(墳)-1



001(墳)-4



010(住)-4



010(住)-3



001(墳)-7



001(墳)-6



001(墳)-3



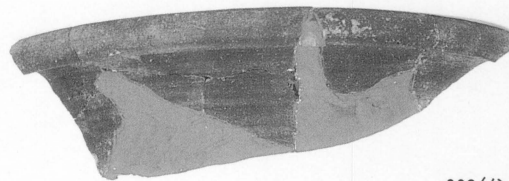
009(住)-3



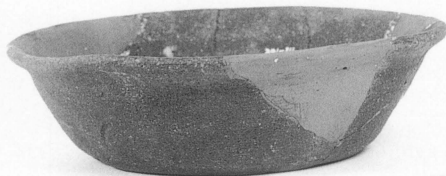
001(住)-1



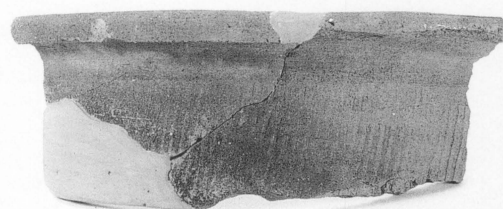
009(住)-5



008(住)-20



009(住)-4



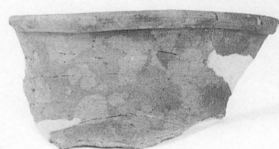
008(住)-14



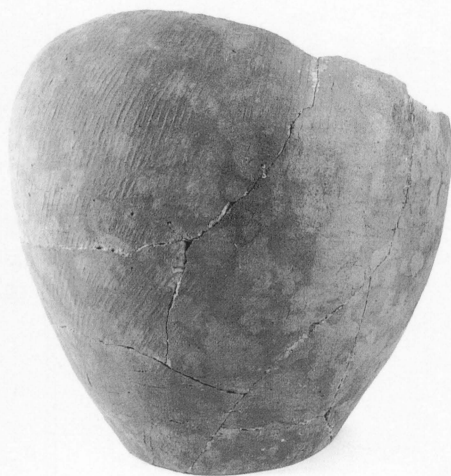
009(住)-2



008(住)-17



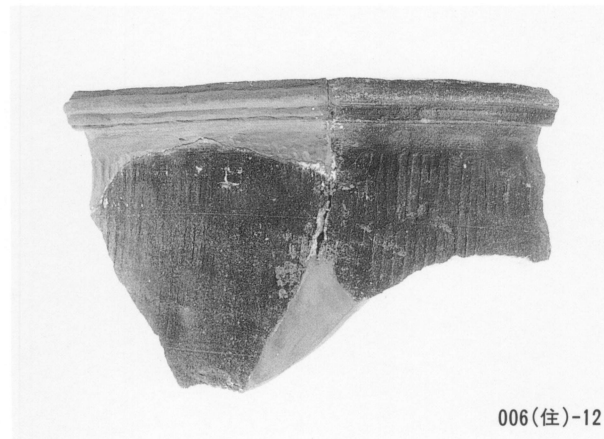
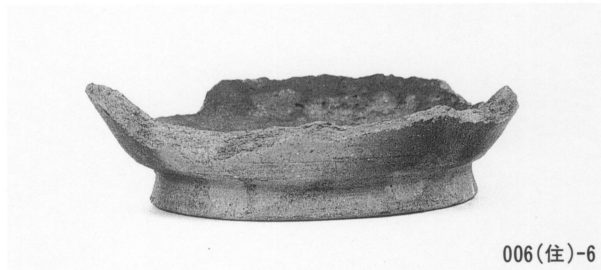
009(住)-1



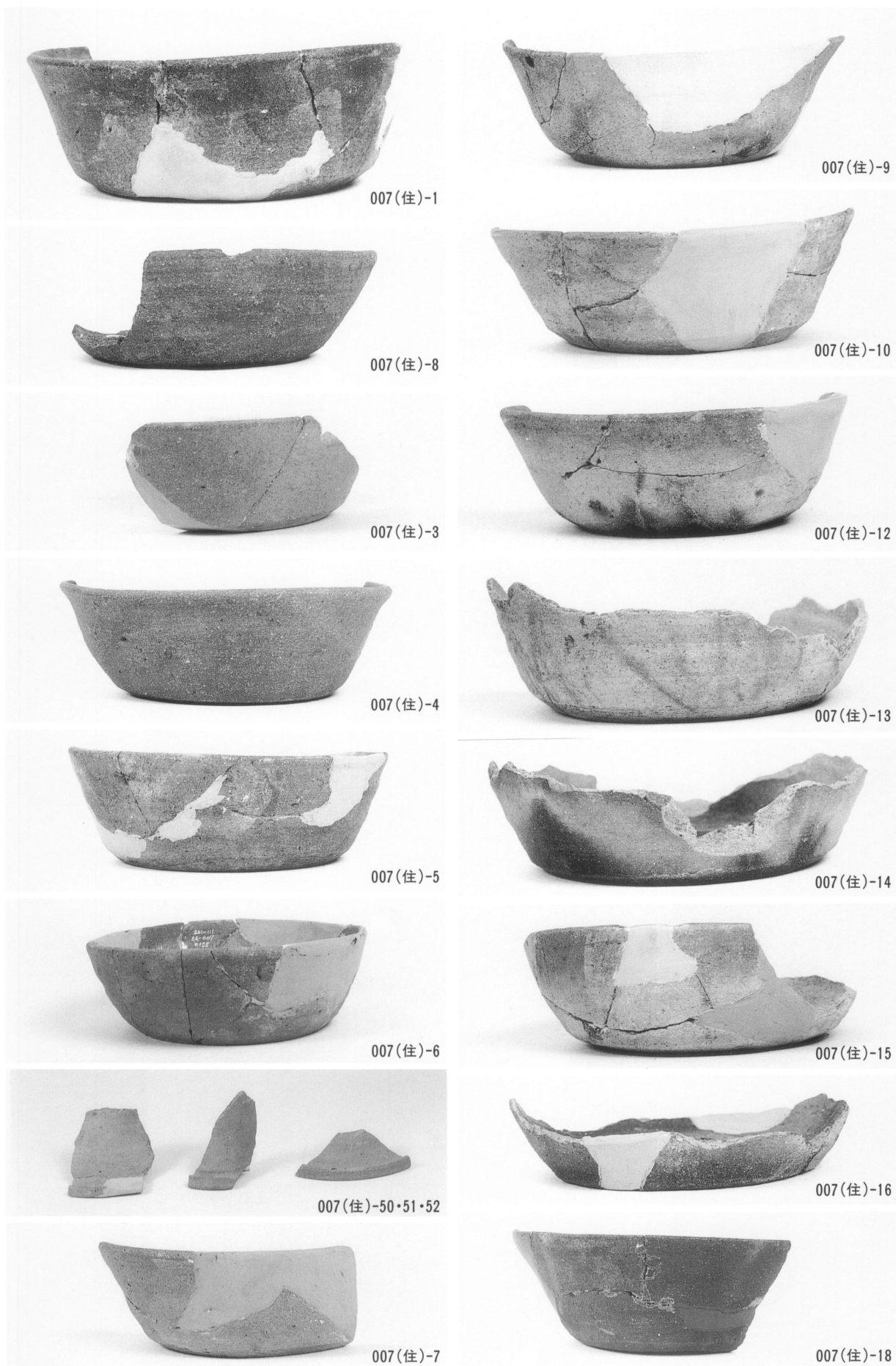
009(住)-1



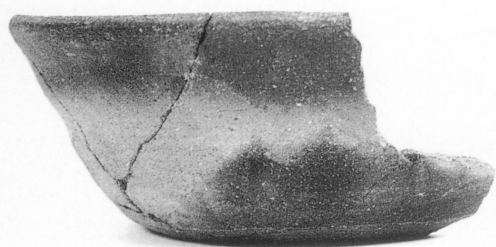
008(住)-18



竪穴住居跡出土遺物(6)



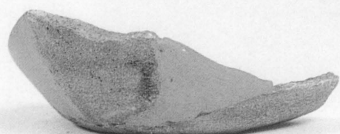
豎穴住居跡出土遺物(7)



007(住)-17



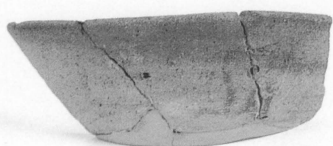
007(住)-49



007(住)-21



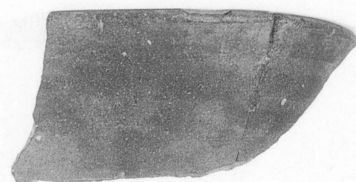
007(住)-43



007(住)-22



007(住)-44



007(住)-23



007(住)-45



007(住)-24



007(住)-46



007(住)-26



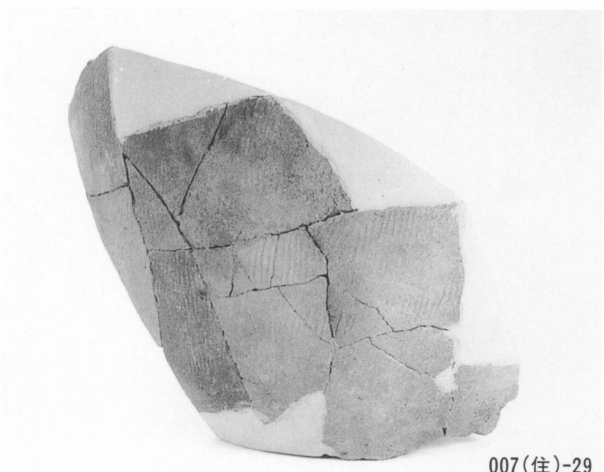
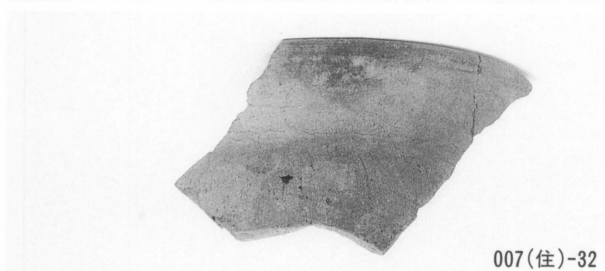
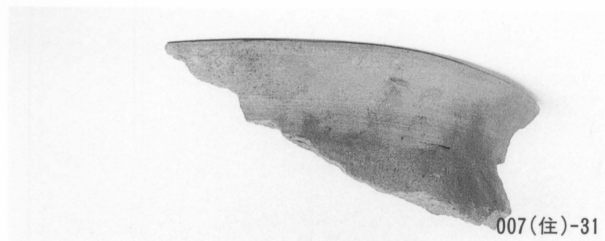
007(住)-2



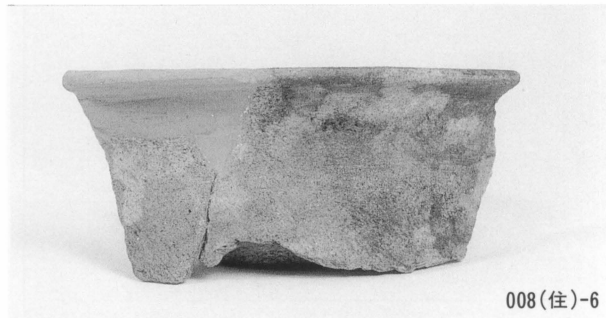
007(住)-28



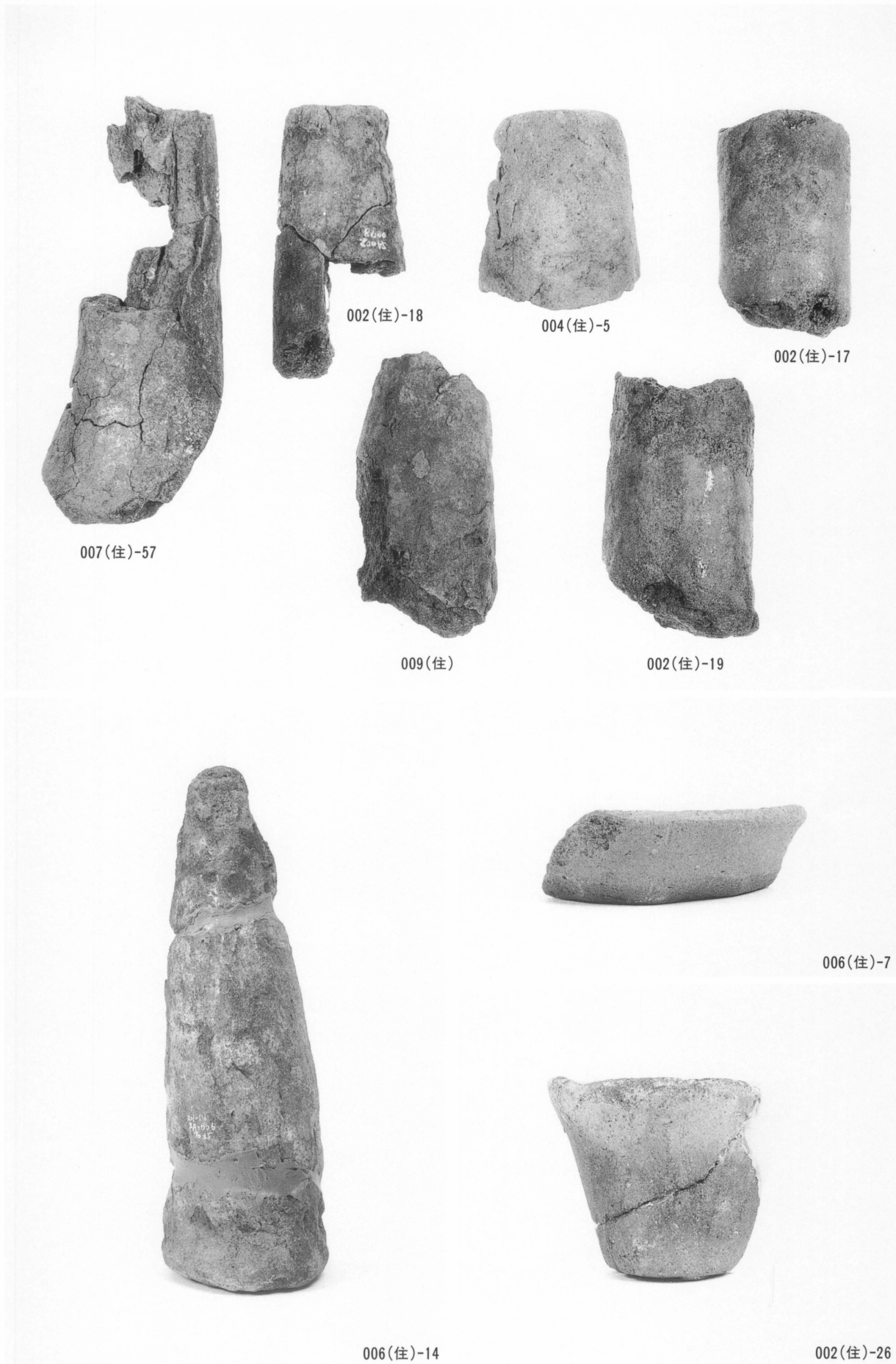
007(住)-33



竪穴住居跡出土遺物(9)



竖穴住居跡出土遺物(10)



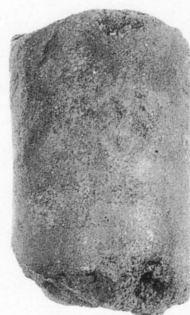
007(住)-57



002(住)-18



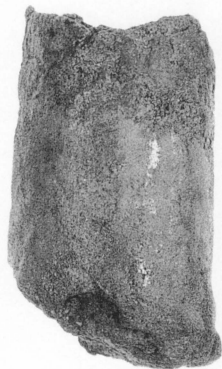
004(住)-5



002(住)-17



009(住)



002(住)-19



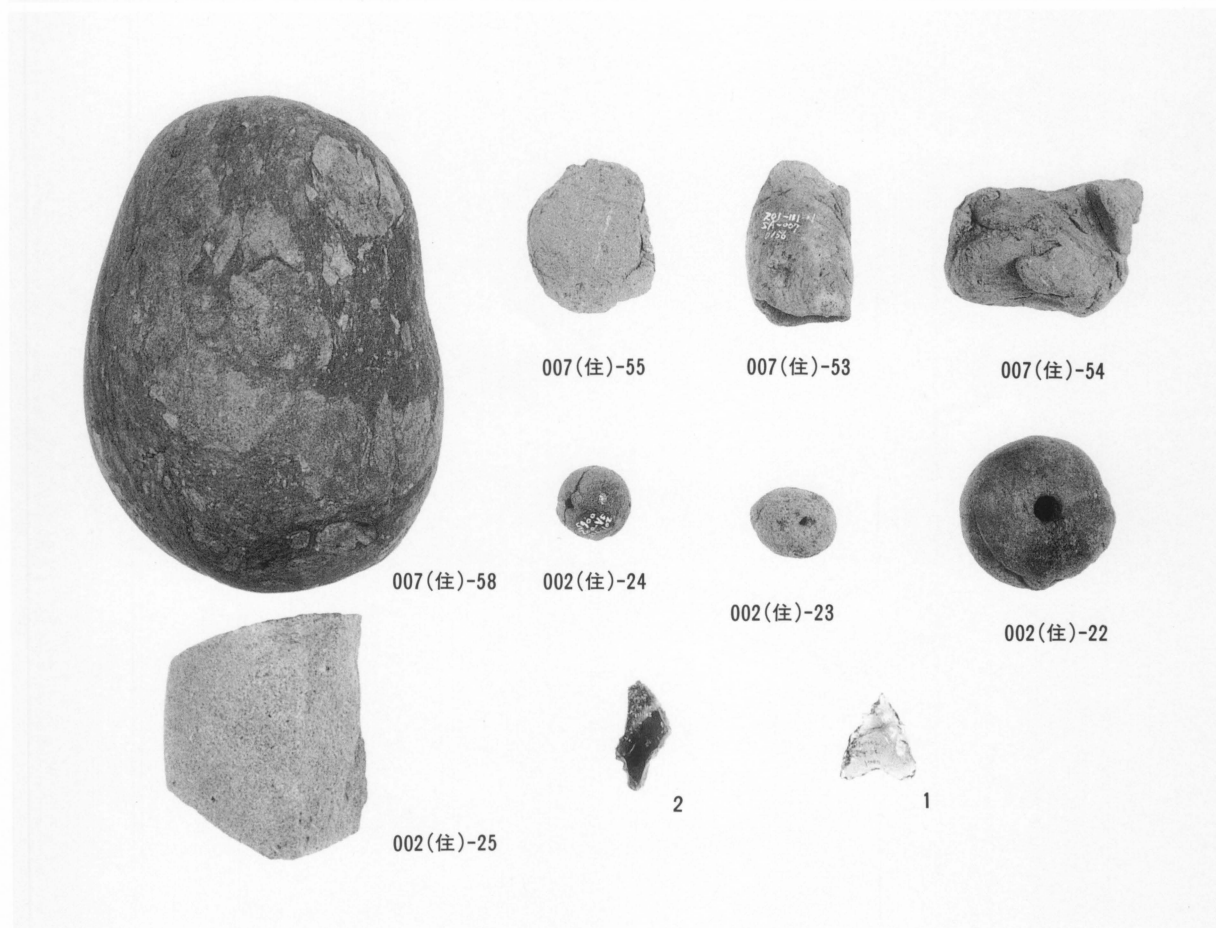
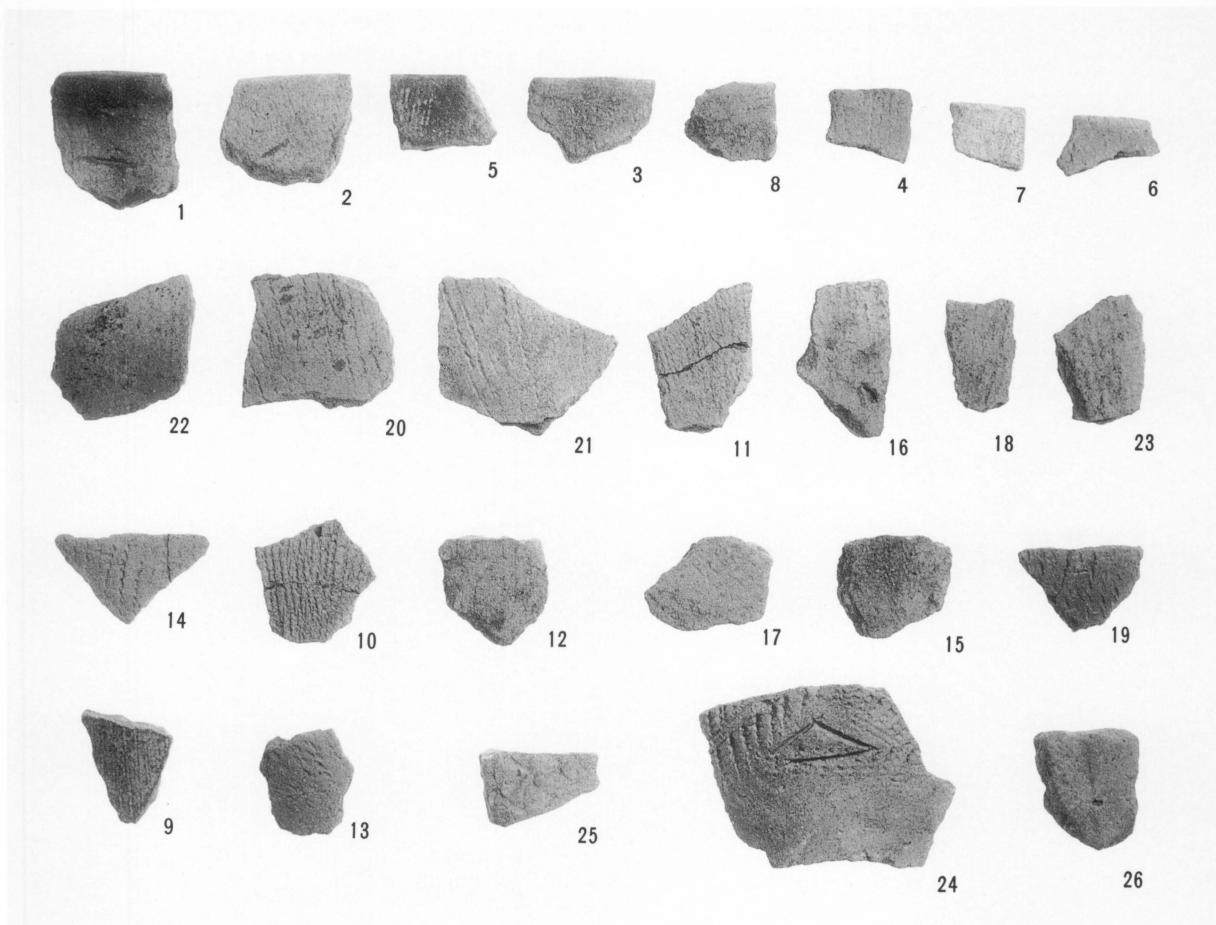
006(住)-14



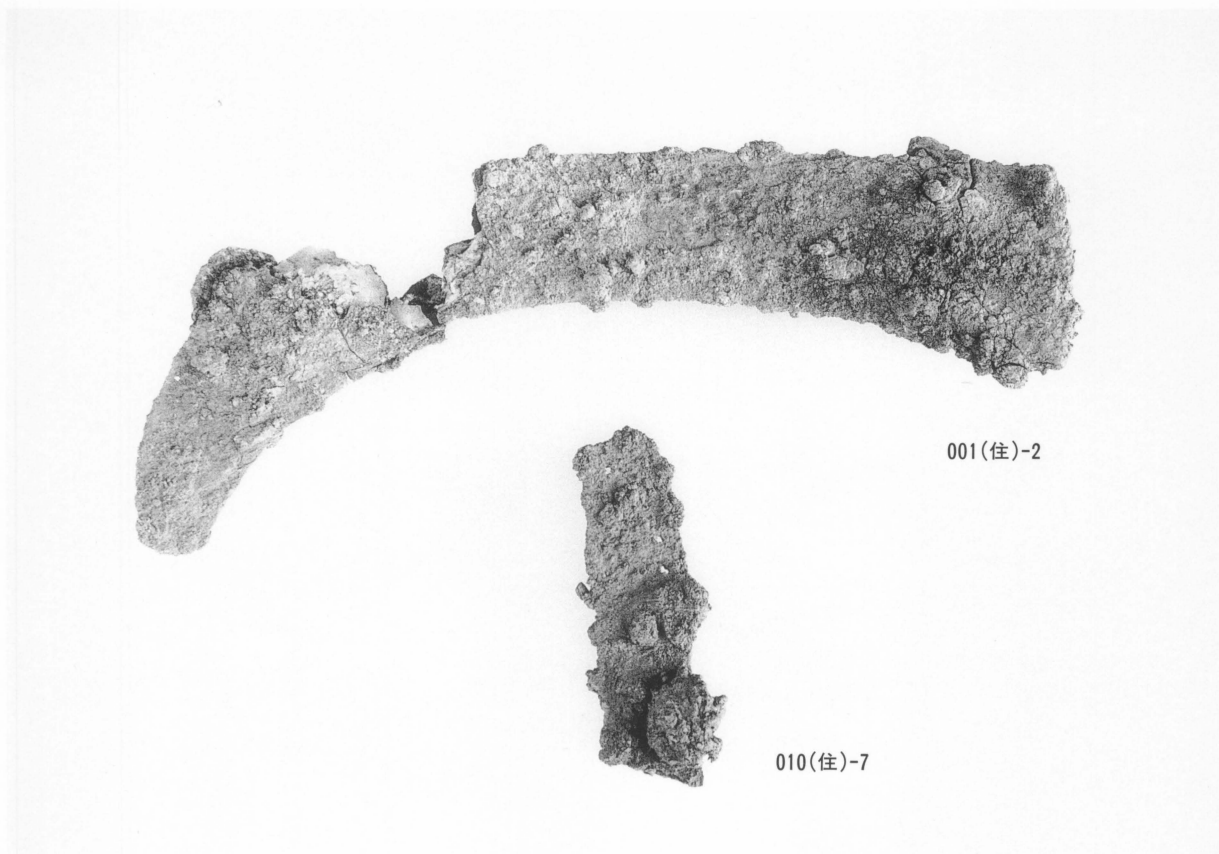
006(住)-7



002(住)-26



縄文時代土器(上)・石製品・土製品(下)



鉄製品

報告書抄録

ふりがな	ちばしにしからさわいせき							
書名	千葉県西唐沢遺跡							
副書名	かずさアカデミアパーク代替用地埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第281集							
編著者名	小笠原永隆							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡809番地-2							
発行年月日	西暦1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしからさわいせき 西唐沢遺跡	ちばけんちばし 千葉県千葉市 わかばくなかのちょう 若葉区中野町 1657-1ほか	201	111	35度 35分 50秒	140度 15分 50秒	19940801～ 19941031	23,500	かずさアカ デミアパー ク代替用地 建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西唐沢遺跡	集落跡 古墳	古墳時代後期 奈良時代～ 平安時代初頭	竪穴住居跡 方墳 竪穴式住居跡 掘立柱建物跡 方形周溝状遺構	5軒 1基 5軒 4棟 3基	土師器、須恵器 鉄製品（小札） 土師器、須恵器 鉄製品（鎌）	特になし		

千葉県文化財センター調査報告第281集

千葉市西唐沢遺跡

かずさアカデミアパーク代替用地埋蔵文化財調査報告書

平成8年3月29日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千 葉 県 土 地 開 発 公 社
千葉市市場町7-9

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 正 文 社
千葉市中央区都町2丁目5番5号
